

嬉遊笑覽 十二

農務省 圖書 第 共
 號 册 冊 冊
 十 三 八
 五 八

太政官文庫 和書門
 八 〇 八
 一 六
 册 架 函 號 類

內閣文庫 和書
 八 〇 八
 一 六
 架 册 號 類

內閣文庫	
番號	和 8208
冊數	16 (15)
函號	184 10

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM, Kodak





喜遊表紙巻十二目錄

五十九

明治十三年

會典

水を鳥 地のひし 孔雀のひ 天狗葉立

猿狩

根川通典 鹿の折時言 根 虫取眼 万のさ藤 拾神玉

四國と廻り猿

人馬とふま 食落野や牛と取

廿二文の猿

光陰道 陣猫 ちりり 猫と扱ふ

猫の袋犬

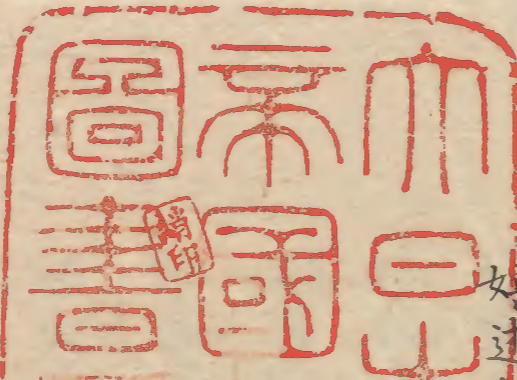
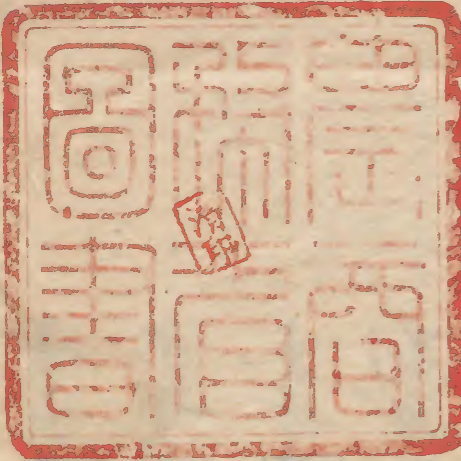
犬の声 登り 二重の白毛



氣の嫁入 氣鳴 氣落 人馬鳥獣と取 氣ふり

能の面 猿の志 狐の志 狐の志 狐の志

かきつき 猿の志 猿の志 猿の志 猿の志



嬉遊笑覧卷十二目録

五九四九番

明治十三年購求

禽鳥

水鳥 蛇のうい 孔雀 天狗 巢立

猴

猴引道 吳 厩の祈禱 眼 蚕取眼 ねぬき 寐 格 禪定

四國を廻りて猿

人馬とあそ 食後 牛と成

十二支に就

光陰道 神猫 ちよろふ 猫を扱ふ

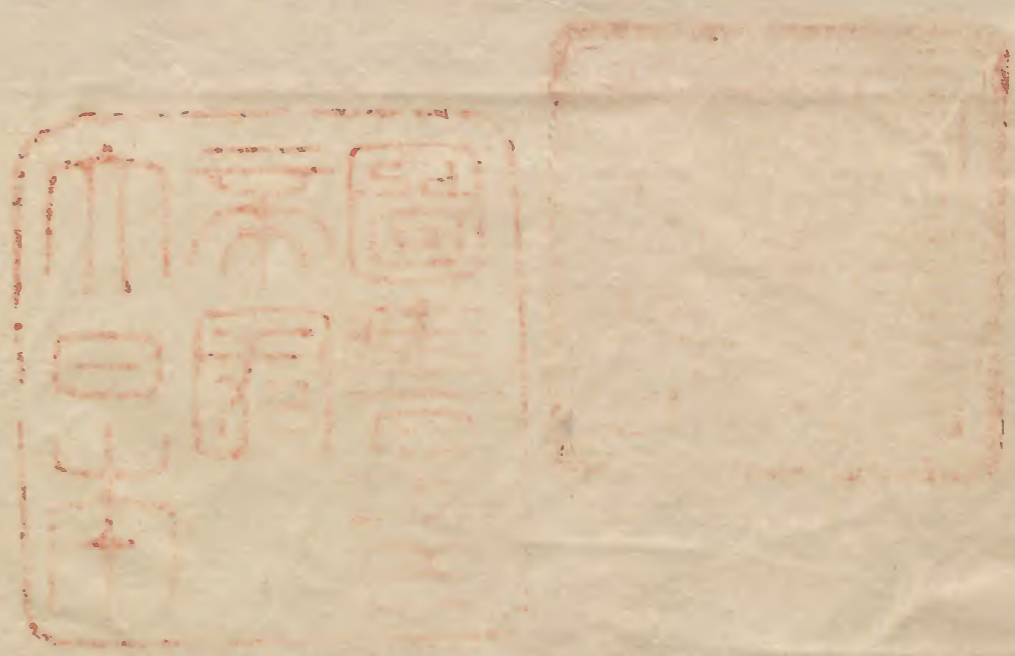
猫よ袋 犬

犬の声 白氣

氣の嫁入 氣鳴 氣落 人を鳥 歎 氣

鼬のぬげ みる 狐の窓 狐のよめ入 獺

うさぎ 二帝 烏 輪のま 蝙蝠山椒 雁





蝸牛角こづせ 蠅の拵つゝひ 蠅とり 蛛 喪紛 蜂拂 蛙の吊
 蛙合戦 うゝ目成借 蛙を釣 蛙を食ふ 螢狩 螢合戦
 蟬を捉 西さむら 沓々さくさく 法師 蜻蛉を捕 蛛の灸 蛛の腹切
 あゆのあゆ 虫採 虫吹 促織 鈴虫 松虫 虫籠 虫屋
 麥摺あ 虫成種ツル 法 冬蝨を飛と 虫の油を髪あ 蓑あ かし
 蟻の態あ 冬 蟻の闘 螳塔 蚊 蚯蚓 小兒陰腫 虫目鏡
 闘雞 とまむ 野郎遊女雞合 小鳥合 鴨合かり け子あ ろ
 鶯合 三光 鳥菴古製 結え 液し 鳥屋あ けし 江戸鳥屋
 喜遊 鶉會あ 二放飼 鴿 あ の声 梟あ の声 白鳥 あ

嬉遊 瓢の拵あ 鴉の草茎 四 寒苦鳥 諸鳥飼 あ
 (鷹狩 犬 鳩あ 鶏あ つゝひ 鹿狩 狗山 鈎 百濟王慶仲
 六物 あ らず あ らず あ らず あ らず あ らず あ らず 地獄あ
 大穴あ 阿あ 御菜嶋 汐乾 突魚 あ
 須あ 釣 竹煙 魚頭魚 蝦虎 あ 根釣 川釣 田舟釣
 陸釣 金魚 あ 鉢 談義坊 杜父魚 水瓶あ 魚あ
 草未 草合 あ 馬唐穂 あ 松葉 あ
 款冬皮 干草葉あ 雛 弟花 あ 山茶あ 座 白あ
 地錦抄 艸木あ 牡丹 本艸家 あ 葉合

目貫 吹花節 萩寺 梅屋敷 信玄寺制札

桃栗三年 橋下菖蒲 稗蒔 ウドシテ 花の塔 事始

灯籠の蒼花 桃木 八重枝 びんごんの木 あんま

大木 正月松 松竹梅 松樹 松葉の兵

藤原吉野 花を瓶よさけ 活花 池坊 廻り花投入

菜籠 薄ぼる 受け筒 落板 立巻 後世生花師

菩提火坑 菓樹の年まきを兄ふ 嫁樹 竹

藤原吉野 花を瓶よさけ 活花 池坊 廻り花投入

嬉遊笑覧卷十二

禽患 水たまり 蛇つゝひ 孔雀はくし 天狗

猿まじり 猴剣乃良 厩の祈禱 ざる眼 蚕取眼 ざる眠

捕まいたぬき 格禱定 四國を廻て猿と成 人を馬とあそ

食後 牛やなま 十二支れあ 光陰道行

禽獣の外 片端のふたを 観せるとする事ハ 歌存妓

挽町の処 異類異形のもの 洛陽集ニ

君代や鬼の生捕 初芝居 武 志ま何あて 珍しきことの哉

施於釜中取少藥糝之即化黃水流平復如初然十指所存亦
 僅四耳或欲捕之蛇藏匿不可尋則以小葦管吹之其蛇則隨呼
 而至此為尤異其家所畜異蛇凡數十種鋸齒毛身白質赤章或
 連錢或紺碧或四足或兩首或僅如稱衡而首大數倍謂之飯揪
 頭云此種最毒其一最大者如殿楹長數尺呼之為蛇王各隨小大以
 筠籃貯之日吟以肉每呼之使之旋轉升降皆能如意其家衣食頗
 贍無他生產凡所資命惟視吾蛇尚存耳亦可彷彿豢龍之技矣

蛇盡をりて資命ととれし者ありむ蛇盡大盡少りて搜神記よ
 蛇をりての蛇はつひのこの語よ蓋のよしいともいふとて思ふとて
 蛇盡をりて資命ととれし者ありむ蛇盡大盡少りて搜神記よ

後書山嶺南雜記潮州有蛇神其像冠冕南面尊曰遊天大帝
 合龍中皆蛇也凡祀神者蛇常游憩其家甚有尚神借貸者何るの
 類ありし本邦の蛇を祀れるはさうよ何れは蛇也ハ多く

蛇に和刻祭云大神、四國にありま人を害す
 犬神ある者の末何れ良民かこれをいふもさういふその考も
 何れまればは即崇りてその人を悩ますむ性あり病家
 此例の大神ありてありてそれを欲する物を同様のれして吐いて
 されど何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも
 云州に概盡何れ又四國に蛇盡をりて者何れをいひて
 石見ありて土瓶と云其毒をいりて各付るふべし

よて犬狛いぬわと云ふとありていづり邪術ありぬるくひひ

のふと婚を絶交りを締ひ又備り前後州は猫神猿神あり

て狐神のいし信州伊奈郡のい上州南牧のいたされ使い同い

上州南牧の人語りしに狐は麓のたさめて毛の色白あり又赤班黒班あり

武州の内にもありといふの歟ある家より婚姻され随ひ来りありといふに三州遠州

ぬて管狐は此れ也又或人云信州伊奈郡松島宿の狐村ありて怪獣を殺すと形獺の如き

猫などあり面は全く猫の如し尾甚大く栗鼠に似たり誰と見知りしと管と云ふこと

いふ前より管狐と別種と見あるの形状をいふ本草は所謂猫狸也

○孔雀つらひを貞徳が油拍あえやくと江戸めぞいハ孔雀い

とていふいん秘傳花鏡い一名越鳥出交廣雷羅諸山い聞

人拍手歌舞及絲竹管絃聲是鳥亦鳴舞畜之者每俟其尾開取樂其性

最姑見人着彩服必咏之といふなり按は杜甫の詩句は屏開金孔雀

とていふと舞いぬるやいさより舞を好むりのなればい

あはれはいさよとていふ孔雀つらひは尾を開くは此鳥は

尾の金眼を孩童戲すよはよ叫んで死ぬ事者とぞ殊よ

膽と血と糞と毒をまけしといふなり物いは嶺南のハ肉

を餉饋とあはれ味雁の如しとていふ百毒を解といふり但是を食

るばれをいくも効なりといふなり天狗卓立洞房語園局

庵が梟辨さいつは菅原町小芝居めて天狗のいせものい呼ハ

つて手紙とぬて人を招く何ありむたなもいふ知ふて這て

宝曆三十七年
東ヤゲニコ、ニコニ云ル
如キ物カキテ題天狗
巢立（二）トシテ子ヤ眼ノ
ウチニ杉若葉

これが鼻の窟の毛をぬきて丹を塗り込みちいざ此兜巾をうがを
紙めて裁付をたのしむ候に画々天狗の如し世中をただけぬし
たるとあれと今も鳴たし我れりて件の如く是を天狗の巢立
とて思ふはむやむやあり
猴（二）トシテ様にあひてあがさるるにめをばるるのなるを六指猴と
猴とぶらひ云へしとる戎馬の祈禱ふると廐子猴木とてとる戎
はよく木あり稗海の中よ収めとる獨異志卷上東晋大將軍趙固
所乘馬暴卒將軍悲惋客至吏不敢通郭璞造門語曰余能活此
馬將軍遽召見璞令三十人悉持長竿東行三十里過丘陵社林即

后山詩注卷二
猿馬并引 楚州茶
極官有画沐猴振索
以戲馬頓索以驚園
人不測後鞭之入言
沐猴宜馬而今為累
作詩以導馬意注韓
郭四時纂要曰常茶
猕猴於馬坊内辟惡
消百病令馬不着疥

散撃俄頃擒一獸如猿持歸至馬前獸以鼻吸馬々起躍如今以猕猴
置馬廐此其義也このあはらうと漢土ぬきとる別ぎとる物あまは代用ひむ
奔民要術事言 志しれどもさうは物あはれを猿も猴も通して
さうはさよとるもの漢土ぬきとるり 別ぎとる物あまは代用ひむ
るいふもそのうらめしむとく猿もあはれ猿も物あは
いふは何めしるんいとねぬあはれぬあはれぬやがさるひの
るかいやまがれが益あまするれいむむむをいふてさあまひと
ありて改めるとぬきとれぬとさるを猴とてハ列子よ宋
有狙公愛養狙トシテは狙バガとては舞を狙公といふ

恨く助坤子に乞ひづあめくもきい出されしもの人
 多しいぬるりくあつてもせんもののみあめくも
 間の猿の同し怒ともをそれし猿は長カ戦さしたるバ猿より
 いなり貞徒独吟自注百韻 昼中よりその木乃実をわけりもの
 はふら猿よ志つあすもあし 白飼の猿未実を
つちさす折れり 月のあまもつきこれ
 あつてもや さるのひのぞカ
とくあり 又淀河よそのけき太刀をつづき逃去
 て知子用心しちを猿曳おろす油粕よあきんとをしれば引きとむ
 神礼をくかきやの猿つひ髪草よ世中よいぬりのきり
 この七カなと何り又猿まひ腰といふと京童よぬを死にける

此の山は山名不詳
 鏡よ畜之者使索縛其脛坐於杖上鞭撻旬月自馴養馬者多畜之厩
 中任其跳躍可辟馬病丙者畜之教以戲舞拳動儼如優人好事者
 多般訓練使之應門或對客送茶以此駭觀取樂云又一種小而毛紫
 黑者出交趾畜以捕鼠勝於猫狸頗有靈性能知人意飼以生米果物
 則不大若飼之熟物易大可愛也又一種小もものあり四圍さる
いづれをあれはちより飼はれは
 三寸ばかりの物はおおよそはめとよむを嶺南乃產
 此で廣東新語も拳猴といふもの四圍さる 紀州粉川より

狂言の狂言のあし
られてト云ハ異本保元
平治物語大場平六景
義為朝三勝射サレテ
才景親カ助ケルニ云ク
他人ハカレカ助ケ申サレ明
暮コメミセ玉ヒツルハカ、
懣リ玉フカト云ケレハ云
アル詞コレナリ今世幸キ
三逢ルハ大ナルメニアアト
云フコレハサマテモアラヌヲ
小目ト云フナルニ小辛キ
メヲニスルヲ云コノ狂言ハ
ソレニ米ヲ兼チイヘリ
今人コキミヨイコヲニクイ
ナト云フコソソテイル
多シ古ヘヨリアリ散木集
述懐百首内ニ
アハレテウ身ノコトクサハシ
モガレテコモロキ物ハ涙ハケリ

出カシテ西土あを品類多く見ケル今この條ニ用あり
カシテ道々といふも訓蒙宗彙ニ中國の猿さぬ
猿をさきさき猿の腹にたぐを多く付して此猿の腹め物
多クつばらるを猿牽といふといふありしものと猿牽の長
然と云後ハ移りしと云ふ
物ハ入ル物のはや
狂言 猿言は物と猿のいさみの米をこしてかつかも
此の猿牽は餌と赤熊のやけ物と投て刀ハスハ寛文
と云ふその事止しあや又訓蒙宗彙ニ猿牽あるを伏見
の造やが猿の腹に編笠腰の餌と付米を入る猿牽

とあるはあつて傷しり古き前向付掛
いそは石之紙猿のあを書とある事跡合考ニ留屋又たんが
物産を記して云猿女産京折柳所よりし時揚屋の猿の子方馬
産を立墨馬ぬ六足ツ飼至曉ノ客のゆる時その馬ニ鞍迄立せて
送りし也その揚屋ニ橋屋といふまゝの考に依之て以て正月の初猿
牽揚屋中の子産を被ひ給ふとある先橋うる屋より舞し初め
し依之て末代揚屋ニ馬を飼ふれども今年より毎正月
猿牽土居町より時先揚屋所橋やが許より初め云といふ
後流云昔揚屋ハ茶や一軒ツ付てあり尾張屋といふ揚屋ハ尾張屋と云茶屋
有揚屋ハ外繁ありしといふ考のるを法あが為に後く尾張屋法十師

疎りしつし社ハ猿曳大門を穿りあしり入て先尾張屋へ来りて
猿ひをれり家ごとよ歩けり今ハ猿曳廓に入とあり 江戸ハ三谷橋乃

こころハ猿牽々家十二軒ありて 正五九月ハ、所歴之祈禱は出せり
徳大者の家お此所ハ終始此中より出さし近國の猿曳とも江戸ハ

来まばこの十二家此内ハ名なく毎江戸中を曳ありくと也

○猿まふこ蚤とり眼ハ同一とし 守武千句ハこぞあふり来をえ

初めき大橋ささるまふたに花をささる丹前能ハ好物をいくと

猿がの〜取眼さ〜これをささる今ハ〜やり眼といふ者きたる

猿利にさる智あふや〜さる付といふ事又多〜事文對聚三十九梅聖俞受勅修唐書語其
妻乃氏曰吾之脩書可謂糊孫入布袋乃氏曰君於仕官何異鮎魚上竹竿耶聞者以為善對これ心の
修あ〜ぬを云ぬり妻のいふ事
たぬ〜とあり〜さる〜

○猿移り可咲記あま暖たる昼のこと

あまよこころ〜とき馬さよさるぬかり〜云々猿が移り

移り〜空移り〜空移り〜たぬき〜浮世お落

家ハ盗人の入る〜たぬき〜たぬき〜何り

續山井は〜みさる〜狸移り〜の胡蝶多〜たぬき〜福いり〜

〜狸を空移り〜徐実父が毛詩名物図解ハ格睡と

いり本草啓蒙ハむ〜あま昼を目る〜耳聞え〜人近付

〜も動〜眠さる〜たぬき〜たぬき〜

今俗といふ小田系評定といふ〜をむ〜評定〜いり〜

五元集乃身や貉評定夜明〜依返〜狐ふし土俗物〜

よく志ざたれ者を貉つきのやうありといふ他めく狐つきのやうを
おぼしめし他を貉と貉と稱し人をつつて貉と稱し四圍を廻りて
様とあるといふは流の風来が放屁漏り今童謡又一ツ長屋の依次を流
後四圍をめぐりて様とあるニ人の連夜はゆきやをとおさるる身
あまはきて来りてといひそのはしをいそめしあはれをいふは流の
のりよりをいひていふは流の流をいふは四圍をめぐりて移り
去る舊本今昔物語は通四圍辺地僧行不知處被打成馬語あり奇異
雑談み丹波奥郡よ人を馬となして賣りし又越中めて人馬と
ありし言勝陀羅尼の奇技めてたさうし事れといふは流の流

明和初年ノ千柳点
谷汲力ハ常久成リ

物珍なりといひゆき事しされが流の流は久き事とある後人
は流の流といひていふは流の流は久き事とある後人
之上有物異猴相類長七尺能作人行善志名猴一名馬化或曰獲伺行
道人有後者輒盜取以去云々取女去而共為室家其無子者終身不得
還十年之後形皆類之とありいそめしあはれをいふは流の流
猴と類といひていふは流の流は久き事とある後人
てき馬といひていふは流の流は久き事とある後人
蜷菴瑣語明朝南京孝陵内蓄鹿
数千頂懸銀牌人有盜宰者抵死崇禎末年余解糧到京往游陵
上猶見銀牌鹿往林中始信唐世芙蓉園獲漢時宜春苑銅牌白

鹿為不誣也。其おむし右幕下の放き尾に金牌を帯する鶴
分ちあはれに此あうり河の人は宗師の牛を飼ひて其の

飽きて食て寐きは牛のなるも小兒の教ふ食後は歩かぬ
ありきと又これも積あり各所和歌物語の撰三浦修心見ゆる今ある

池田の牛

池田の牛ありしにうづの郡は川といふ在りて其の牛は
池中に泳あり昔この里にぬひをんとといふ農人あり信を一人
ふりて此信をよよまぬにぬひのうづれし必し或時黒き牛
一疋をふれて庭をよほりて種をうづてみまをいませと鼻つ
ぬきぬびの牛ぬしありとて牛麿ハナツラをよけしつふき立れば昼は

むむ好む信の牛は成るるしぬひ信の信を病て又牛はありしは
まじりのためしあれをよそ池をわたり此信は二疋の牛を放ちて
事百二十年以前の事し今もその二牛此信の信をわたりて
まじりて無智の坊に里の谷を肩て信の皮あつき牛とありしは
世のふ思後也智まうまに信をよそしむる此信はあはれく名めや

あはれし 此か信の牛とありたる古物ころういふ多し 劉公嘉話録の閑元中画匠解奉先

とらつもの信は誓をきて牛は生れし物あり又李伯時よく
馬を画りて道人戒めて云来生馬となるしそれより改めて仏像
をの画りしやぞ 昔信の昔信の画工牛をかむとて思ひをこしし信ありしは牛を信牛とよみしは人ぬらして呼ぶ

かくと昔くふそ後の佛像をのこ画まきつらひか昼禱して牛と成しと
いふこと又このお後と法合せて仰りし事たるを願ひし事なり
○牛のまきと

ゆりゆりゆりゆり昔もあつては守武千句りやうきまびのゆりゆり

このまきをいひちかゆりゆりしませ ○十二支の歌新撰狂歌集御行

者一歌の篇をかりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

よめり君乃心の内文... の終ひて油地獄... 嵐...
あつよむ冬... 我... 嵐...
此乃の文十五
をこり 雲谷卧

餘_二朱文公_一理學大儒不屑為世俗文字然遊戲點涿間亦不乏其作十二
禽詩云夜閑空篋_二齧_一饑_二鼠_一曉駕_二羸牛_一耕_二廢圃_一時方虎_二困聽_一豪夸_二白
業_二兎園_一嗟_二葦_一鹵_二君_一看_二蟄_一龍_二卧_一三_二頭_一角_二不_一与_二地_一羊_二雄_一毀_二車_一殺_二馬_一罷_二馳_一逐_二烹_一
羊_二酤_一酒_二聊_一從_二容_一手_二種_一猴_二挑_一垂_二架_一綠_二養_一得_二鷓_一雞_二鳴_一角_二々_一客_二來_一大_二吠_一催_二煮_一
茶_二不_一用_二東_一家_二買_一猪肉_二々_一元_二政_一々_二艸_一山_二集_一十五_二戲_一作_二十二_一辰_二詩_一獨_二笑_一
怪_二嵐_一叫_二唧_一々_二神_一遊_二何_一勞_二疲_一牛_二力_一時_二跨_一虎_二頭_一千_二里_一歸_二偶_一拳_二兎_一角_二萬_一
俱_二陟_一君_二看_一卧_二龍_一睡_二常_一濃_二君_一羊_二蛇_一巨_二窺_一九_二淵_一中_二長_一途_二馳_一馬_二客_一自_二若_一瘠

土牧羊人未窮貪月_二猴_一猴能_二溺_一水_二北_一雞_二抱_一卵_二知_一所_二止_一狗_二吠_一便有_二敲_一門_二聲_一
不用_二燒_一猪_二待_一俗_二子_一々_二卷_一廿_二七_一武_二州_一赤_二坂_一口_二通_一寺_二鐘_一銘_二序_一何_二々_一畧_二々_一銘_二督_一
嵐山_二流_一光_二人_一未_二驚_一牛_二王_一出_二世_一振_二梵_一聲_二虎_一狼_二野_一于_二氣_一縱_二橫_一兎_二角_一方_二便_一誘_二群_一情_二
龍_二宮_一高_二處_一擊_二華_一鯨_二蛇_一室_二腫_一破_二覺_一心_二生_一馬_二腹_一忽_二變_一聖_二胎_一成_二羊_一鹿_二牛_一車_二休_一復_二車_一
猿_二啼_一霜_二降_一月_二色_一清_二雞_一人_二未_一唱_二客_一先_二行_一狗_二不_一夜_二吠_一王_二舍_一城_二猪_一觸_二金_一山_二轉_一崢_二嶸_一
御猫 猫も扱子も袋
犬声 嵐
嵐鳴 嵐おとし
猫小右記云長保元年九月十九日者内裡御猫産子女院左大臣
有産養事復重梳飯納宮之衣寺猫乳母馬命婦時人咲之奇
怪事也云々未聞禽獸用人乳嗟乎と云々均廊偶筆前朝大内

猫犬皆有官名食俸中貴養者常呼猫為老爺オヤジ或曰舐臚ヌク

中ナカ也ヤ合肥ヘイフイの宗伯ソウハクの夫人フじん愛アイする猫ネコ斃シメらるる沉香シヤウキヤウめて棺クワンをシ

て瘞シヤイ免メ女僧ニョウソウ十二人を延マシき三昼ミチツク飯道場イヂミチを建タテりニ

枕マクラ多タ紙シりニしテるヲはハはハ紙シりニしテるヲ命婦メノトメのおヲ

世ヨにもモならずニてモたまははしられしりキきハかかつつるるをシめし

此コノ右ミの小右記コノミナミノキはハ右ミのノ小右記コノミナミノキ

也ヤ而シテ不レ能レ捕レ一ニ鼠ネズミ云クもシ京師キヤウシ内ノ寺ノ貴ノ威ノ著ル著シ猫ネコ

堂ドウ白ハク肥ヒ大タイ逾ヨリ數十シユウジツ斤イン而シテ不レ捕レ鼠ネズミ但シテ親ノ人ノ耳ノふシとスリ

たげにて好クくハ花ハナ多ク余ノ性ノ子シ猫ネコ字ジ此ノ音ノのハ心ノ祇キりハ五ノ音ノ通トするニ

浮ウキ其ノあらふヲ猫ネコとシてシらレるト云フるハ心ノめやあらふヲ福フクとシてシらレるト云フるハ

異イハかかるトしテ又マ猫ネコハハ格カクみみのハしられル漢マン林リン猫ネコのハ面メン拍パクみみのハ似ニてシらレるト云フるハ

洛陽ラクヤウ集シユウちようのつつなつ名ナ

そノ傍トきノ猫ネコのハ美ミ 左サをシられル柏ハク木ノとシてシらレるト云フるハ女メ三ミのハ宮ミヤれしるヲいハひるト云ふハ

著シ蘭ラン集シユウちようのつつなつ名ナ

著シ蘭ラン集シユウちようのつつなつ名ナ

秀シユウとシてシらレるト云フるハ揚ヤウ屋エのハ名ナとシてシらレるト云フるハ

今イマ所ノのハ猫ネコはハひりり揚屋エのハ名ナとシてシらレるト云フるハ

西陽セイヤウ雜ザツ俎ゾちようのつつなつ名ナ

目メめてテ付ツく知り地震シユウインの時ノ日ニ和ニをシるト云フるハ

時トキ日ニ和ニをシるト云フるハ

日知録ニ山東河北

謂北猫為女猫

外戚独他傳猫女

可未無住官中是隋

時已有以語トイヘリ

彼怨ハメオトヲフニモ

ソレニ文字アル故女

猫ト云トツテシキ詞ト

見ヘタリ

俗ニ禽獸ニハハラス

メト云コトスハ云フハ何

義モナシメナトハカトハ

單音ニテ口語ニ使フ

ス依ラズモジリ付テ云

猫ノ画

我衣ニ云明和安永以
鼠除猫ノ画ガシトテ市
中ヲアルキ六常州者
ニテ名ヲ雲友ト云又蜀山
人ノ話一云云天明寛
政ノ以白仙ト云云年六
十三近キ坊主ナリ出羽
秋田ニ猫ノ宮アリ願フ
テリテ猫ト虎トヲ画テ
社ニ一枚ノ奉納スト云
自ラ猫カキト称シニ筆
ヲ持テ都下ヲウカレ
アルキ猫カフクトイヒ
シヲ呼入ルニ西カニレハ
僅ノ價ヲ取テ画ク其猫
鼠ヲ遊シト云
桂花叢談ニ唐ノ禮宗
ノ末トカヤ廣陵ニ窮丐
人ニテ社可均ト云モノ符ヲ書テ鼠ヲ却クト云ヘリ似ルナリ

猫ノ日 猫ハ代名影ノミル哉古き哉画ノミル哉油物ノ音マア猫ノ

耳トモミル哉人ノ代名ノ白ツをミル哉見ル哉 袋ハ母ノ言哉 子ハ母ノ言哉

画ノ滑ヲミル哉紙袋ノミル哉田植ノ種ヲ脊中チル哉

清志ヲミル哉 〇ニミル哉 牛馬ノ外ノ傍

ヲミル哉 強健ナルト云々 尊郷贅筆ノ人ノ

淨身者曰閻官肘後經曰牛曰官猪曰閻馬曰駒羊曰羯雞曰鵝狗曰

善猫曰淨ト云々 雜カキト云々 雌ヲ云々

猫ノ云々 益云々

異仁紀八十七年 昔丹波國桑田村有人名曰養襲家有犬名曰豆

往是大咋山歎名牟士那而殺之犬名を付と云々と云々 格を

もいふて云々 枕雙紙み前まうと

いふ犬の云々あり犬を云々 甲陽軍鑑ニ武ノ山岩付

大田源五郎幼少より犬を云々 松山ノ城ニ飼テる犬を五十足

居城山岩付ニ坐山岩付めて飼テる云々 松山ノ一揆起テ

以て云々 犬ノ頭ヲ結付十足を云々 片叶ノ山岩付

持来ノ云々 犬を云々 古き云々

是ニテ流波集 西音法原 我心云々 犬をけし云々

いふ云々 犬を云々 犬を呼ぶ云々 犬子等

東の野々狂言記續卷一むらじのゝ急のうらわす目くらぬころり
とらひ鳥の 一休吐はむらげの焼飯をそせ申 犬よよせそころりくと云
後撰夷曲集宗鑑る手向は流ねどまじ目くらぬ急のころりのおまされ
句の手向まふト琴 犬の夢を語りてといふ彼を吐きをいふ
あさむし猿樂様をよそり又ト養様あいままをちといふの我
出とけりまふ語りくと唐も庭めてういほく白黒まをいぬま餅り
望一千句古宮をむらりくとつれ秋さひ狐を犬乃追まうりぬ
夷曲集よ犬様見てもむあを我あうろ志のむらうりむね色むいぬ
土俗四人を今も犬の夢を語りてといふ又むら犬とめころりしる

三ノ大ニヤミエ
二ノ大ニヤミエ
一ノ大ニヤミエ

やまの犬は面をれといふめは埋草寛文元年 坂云也独吟十句 半井ト養落
くまのせぬ花一枝をむらりてのそいそえむらら紅梅垣乃内よ
目を氷がそめの大あをり因果物語はむら犬をりきてあれりといふ
いづれいづれをむらりてむらりて吠狗の泣りたるは續山井孫花ゆき
いづれいづれをむらりてむらりて重昌孫花孫豹 拂十蘇狗日本紀畧よ契丹

大獨二は倭子二はとるころり倭子はあり大獨は俗といふ唐犬あさむし
といふまじや倭子一本は倭子といふを定うあさむし近くまいつの
いづれいづれは續山の井の発句をいづれをいづれは安澹泊答寒川俊
あまの翁薩巴より出ぬ犬の一種千二とやれ正字は尋きくすす

大ノ大ニヤミエ
二ノ大ニヤミエ
三ノ大ニヤミエ

大ノ大ニヤミエ
二ノ大ニヤミエ
三ノ大ニヤミエ

狭衣物持今姫君ノ女房共狭衣大将ヲ立サハキテ争ヒ観ク今姫ノ母代狭衣ニ物イフ処ニワカキ人ノ思ヒムセフメレバ
 犬モトキテトカヤト高
 ヤカニイフイトアヤキ
 タトヒ也云コレヲ下
 紐ニ犬モトキト拳テ
 注ナシコレハ女房等ガ
 争ヒ喋クテ犬ノハハル
 ニ比シタルノ犬モトキハ
 犬ニモ勝レト云ナリ
 一犬吠レハ万犬ノレ随フ
 カ如シ又オカシキハ法
 降ニヌスアレシ女ニ狭衣
 ノ物イフ処アリツル
 カシラツキモマロイヌト
 見ワキモコソスレト有ナ
 下紐ニ有ツル頭ツキモ丸
 犬トコソ見分ツレトセトニ
 リンレニテハ聞ヌフコトハ
 狭衣我見捨テ侍ハ彼ノ
 法師其レヲ知テ来ヘニト
 云レ九ハ自稱シイヌ也
 ニテ犬ニアラス吠フベシ

静帝高澄ヲ逼ラレ朕々狗脚朕と申され此ハ近代ノ落し由ニ
 能合ハルイ義ト日比談言ハリ出ルニハ法存ルとあり是ノ事
 千ニの名義トハあなほなどを事ハキテ千ニノ福をさきて千ニの
 名義例ノ押あけ候ノ事大ニ似テ小キ事ハあり千ニといひて千ニと
 ありしめや近時千ニニ位を降ル所ト云ふ由澄あり耳代後ニ
 天明元年ある大名以上ノ事何れに上常ニ統出ルノ千ニある
 天聴ノ入ぬ事トモ畜類あり千ニの位を慕ハル志あられ候りて

此位を編みしは... 根が... 中井竹山... 犬猫... 武野燭談... 昔ハ唐犬を... 白鼠... 始て史... 爲廊偶筆

外... 犬... 白鼠... 爲廊偶筆

拾遺集物名攷ニ
年ヲ経テ君ヲミシ
寝住ツレ異腹ニヤハ
子ツハ生ヘキ婚スル
ヲ寝住トヨリ嵐
ヲ隠セル詞ナリ

よし白鼠霜毛火眼甚可愛余数見之と稱しげと裁りしと蜷菴
瑣語崇禎年市上有湖廣人持白鼠數十来售毛色如雪眼赤如火
爍有光識者曰此碩鼠也見則天下將亂也少頃之鼠果死
居於るよ白鼠といふものハ吾々幼年の頃迄ハ世上ハ江山を
いひていひて希あるものゆへに類を高くおもちの若れもあそ
ばむとあむてはなむしも何きは僧といふむらうし今鹿よ
畜すものとも人々ありてわりのぞ大黒天の法うへんどのおひ
白狐ハ稻荷のつらうと云といふ心もちめて町人の子代正直実身
は金をもくろむを何事かの白鼠あんどいひてこれハ福のあらまよ

思ひしとれはよ世とるし世とよ白鼠江山あると常の鼠は殊
あまもれとそれのあはれ熊鼠と名付毛色黒くその上品ハ
啜のりよ月の輪白く何れも白黒乃狸あはれどしくハ正徳の
と然者がりとやめや諸説大體ハ水をあつまひて諸説を
仕入云鼠のよと云といひしと白う班う常の鼠もろを居うし
猫と一処よと云とれはといひしと然近う後の本物とて白鼠を
福あつものといひしと世説故事苑ハ宋高僧傳ニ善無畏傳云畏
復至烏菴國有白鼠馴遠日獻金錢太平廣記四百云白鼠身如皎白
月字耳足紅色眼赤亦赤者乃金玉之精伺其所出掘之當獲金玉鼠五百歳

即白耳足不紅者乃常鼠也抱朴子曰鼠壽三百歲滿百歲則色白善
憑人而下名曰仲能知一年中吉凶及千里外事このこと本州綱目又典籍
便覽よりしるす然る常鼠あり本邦よりかたむけの所を
きくげまひの白鼠とて大黒と黒をりて北方の色とし北方子の位
なり白鼠を使者とてま利よかりとされま人富まへ大黒ま
ま鼠の如く白鼠といふも白色は瑞物多りれども世よりくま
をまむいなほひし又鼠のま入といふも茶師通称物也 寛永
鐵鑊の時 廿年
の双鳥
此鼠小鼠也孫つとて後にお福とれ孫の子産座の内の赤鼠とて

此鼠を餌饒みなる鼠とていふも子鼠物なり雌の子鼠は独坐
よ古き話よりいふは鼠といふはあつたんあつたはくし
わりのむし物類稱呼の鼠園西めふの又嫁の君上野めて松
乃このむしあつたむしあつたあつたあつたあつたあつた
鼠の園より年嫁のむしあつたあつたあつたあつたあつた
嫁のむしあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
むしあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
述べた物ありあまは麻起といふ詞を忘懐のむしあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

○オトコ古へ押機ト
イ(リ拾遺集物ノ各
押年與サハニ種鳥
招解ニセ下指ヘタル
嵐野アユカスニ嵐トル
ベアユカスハ動カスナリ
曼ハ嵐ヲ取ム料押機
ナリ

和名抄畷具漢語
抄云嵐野一云嵐弓
於之トアリ今世モモ
ハリタル嵐オトシアリ

葦葉合ト云致仙合セ
元祿九年其角カ亭
アリ常陽カウサハニ
甘酒コホス外落ニツカ
メ鐘ニミフ揃拍

○洗象 輟耕録見
元時象ヲ後仗ニ用フ
ソレヨリ此獸後物ニ備
フルニヤ池北偶談ニ三
今三伏日洗象亦導以
紅仗在宣武門西響音
水剛上明時洗象則
自八月十二日始更三日
為期見北京歲華記
トアリ同卷ニ云圭
塘小葦葉有劇馳賊蓋
蹄角羽毛之屬無不可
教訓者康熙中駕幸
南苑觀象与虎鬪虎
竟為象所斃此又一奇
也

古言ソノギト云ハ今云フ
ソ、カニキシ又乱ソノグル
ヲ云モ意ハ同クテモト
ソ、ルモヒトシキコトハ
万葉十六古ノサギニ我哉トナルモ少年ノスロギサワクヲ云リ

津波めて黒打一村一浪の為に流をせりて我々の嵐野と
犬子集才四地獄ハ余ハ目前ハ何カおけハその後
嵐野何カあると云ふ義取の人はおぼろげに又嵐野と付
り世活を落し地獄の鬼にやうにと夢を入ておく嵐取
極楽をいふと云ふ後の名も嵐野洞房語園し由々嵐亭記
民をいふと云ふ昔ハ嵐野といふおあり竹の中より緒を
思嘗木刻一舞鍾馗高二三尺右手持鉄筒以香餌置鍾馗左手中嵐
縁手取食則左手扼嵐右手運筒斃之以献荆王云々

人を多獣はけき 嵐のりこ 魎のりげ みのり
狐の窓 狐のよめ入 とうきき 二席
龍耳多るよ 咬人を鶴鶴といひ小男我龍鶴糙人を水魎聞ある
人を聞がり此牛躁人をあつとりの火嘿人を牛盗といふとあり
今いふぬ言も多し 悔草ハハたまるくをば 後ちぬちと云ふあり
和訓禁サ、カニノ條略ニ性 童の戯ハ嵐と云ふ魎と云ふと云ふあり二人
噪カニキ人ヲ喻ヘ云トアリ
志てもの甲をうらむとのちぢと云ふと云ふ上をつむお果あきなり
本草嵐附録ハ龍鬪あり和名抄ハ玉篇を引て鬪鬪ハ作と和名
豆良祿古とらん〜〜名義ハ連り行く小嵐といふあり色黒き

まことまの沖物は尻の穴より烟うつこつひあひを樹あさうねり
いたちうをうそ八百まゝ万八ふさうしんを黄多十三いしんう極陰
比事おふふ千いふとニツもまひあし連千ニツと云云

鳥鶉のまね 蝙蝠山椒 鷹 蝸牛角を 蠅の棒つひ
蠅とり 蛛 虫 蜂 蜂 蛙の吊ひ 蛙合戦 かつ目を備

蛙を釣ひしは流のうねり かつら

まことまの沖物は尻の穴より烟うつこつひあひを樹あさうねり
いたちうをうそ八百まゝ万八ふさうしんを黄多十三いしんう極陰
比事おふふ千いふとニツもまひあし連千ニツと云云
鳥鶉のまね 蝙蝠山椒 鷹 蝸牛角を 蠅の棒つひ
蠅とり 蛛 虫 蜂 蜂 蛙の吊ひ 蛙合戦 かつ目を備
蛙を釣ひしは流のうねり かつら
まことまの沖物は尻の穴より烟うつこつひあひを樹あさうねり
いたちうをうそ八百まゝ万八ふさうしんを黄多十三いしんう極陰
比事おふふ千いふとニツもまひあし連千ニツと云云

その夕暮清用心する。鶉のまねは。依お中山集水心りや流の河
筋移れまねを海流は鳥羽つらうひ
又小児のまねはうま聊々物の出まうそを
鳥のうやいも著るいりいりい
○上野を名追めてまのいり六鳥で
かんごんを洗ていりり糞のまのうかうしを買をなうさる
酒よ造りまを酒よ造るあめす。西屋の犬と左屋の犬と
甘ひらうてハ心んあめん強いつてハひんまめうんあめんたまめ
まうけいりりいだめて流るんの大と大痴んの大ととんふ
なめを七まうそいりを鳥のまのいり何れもねあしまう
乃移りくまうそ日光山御宮乃遠し鶉二羽あり二王門の前

乃出茶店ををれきび此茶店めて園子茂きこしをりて
一ツ串を接て空中へ高く投よきハ彼鴉出末て宙めて園子茂き
一ツ園子茂きハ按張り筠廊偶筆楚江富池鎮有吳王廟祀
甘將軍寧也云々有鴉数百飛集廟旁林木往來迎舟數里舞噪帆
檣上下舟人恒投肉空中餽之百不一墮其送舟亦然と云リ漢行
紀程よし此事少つ不拘餅餌粒食撒空飼之群鴉飛舞接食百無
一隊云あり

蝙蝠の飛を口そかきりて山椒うりよ柳乃下る水のゆくま
と呼ぶを彼かきむをまかきよまかきありやう鳴声のちり

としんが喰ぶさあふるあぢいん可笑記よぶをよそのさし限り
かきりて法もむさきやうよたか法さる侍あり云々按よ
唾よもさる後よ託しとて大流法集枯字板おぼる月あめと
かきりて悪いせびくのもやぶさむむせり古くハハ醋といり
咽ハセバもむとて山椒うりよ水のゆきとていふる屋々又醋を飲よ
やういふり同さし守武千白よ山志やうとてむせりやう
ゆりのすものかきりて法もむさきやうよ醋山椒をいふと古
百物ゆよ山椒よむせりいあう後よかきりてあけりなごり
とて和漢三才圖會云蝙蝠性好山椒包椒於紙抛之則伏翼随落

竟捕之といふるを非あらず紙の色も山柵に似たり何れも
おれりとも醋も山柵に彼が好悪より少く何れも 棹めたる色
鉤よあせよて雁の連りて飛を舟ぞふト養狂放春の以鷹の
層をねやくさほふうけてとけきをそとてあすめと何きばがん
かりやうのうりかごとをたふとてれて後棹よあせく犬子集
舟よの棹棹よなりけり之を厂ま次狂お吐棹めありておれり
しつゝつかりの空よ云々松葉葉近江八景に似たりとむきあ
雲よさるよなりてとけり何れもけりさるさるけりあてあ
かろふとて志よ龍後柳川の人云我國めてき龍がいかまがん

あつちやがんとつちやあせのぐんあせよあせよ水のがんが
あせよあせよのあせよ矢のあせよとてあせよいたてとてけり
あせよ 是ら矢ハ雁ひよ誰へともかくがいにそれあせよしにたの
きまかんといふとちといひ近き田舎めてハ身体くらふといふ
是れさぶし 蝸牛夫木集よ土師門院歌を中ぬ心もたふし
あつちやがんとつちやあせのぐんあせよあせよ水のがんが
あせよあせよのあせよ矢のあせよとてあせよいたてとてけり
あせよ 是ら矢ハ雁ひよ誰へともかくがいにそれあせよしにたの
きまかんといふとちといひ近き田舎めてハ身体くらふといふ
是れさぶし 蝸牛夫木集よ土師門院歌を中ぬ心もたふし
あつちやがんとつちやあせのぐんあせよあせよ水のがんが
あせよあせよのあせよ矢のあせよとてあせよいたてとてけり
あせよ 是ら矢ハ雁ひよ誰へともかくがいにそれあせよしにたの
きまかんといふとちといひ近き田舎めてハ身体くらふといふ
是れさぶし 蝸牛夫木集よ土師門院歌を中ぬ心もたふし

てい身をあたのふとて天神のは話とたむといひ其角々文七よよ
ふれこれとてきり今山を角とせ棹とせといひて蝸牛をのりて

そふいとむしをわうしつうちをりて宗禮が犬荒波は集りて

と江戸よぞいれ世中をいとれとてかてつうちをきりかきたるま

とつたり日次紀事云蝸牛見人則蝟縮兒童相聚謂出々虫不出

則打破金云此虫目俗稱金とつり 今この江戸の小見角をせ積むせまひ

滑稽 蝨を捕へて尻に棕櫚の毛を刺で嬉心をつらつらして漢土

あり つつり笑林廣記卷七小官賣屁股といふ語を青蝇引麻蝇到酒

席上麻蝇恣意飲食被小厨拿住將竹篾タリ屁股把燈草与他使棍

半日纏得脱身云金くこの語とたつり又酉陽雜俎に指ぬ蝇を

起す後脚を拾うと脱すと物者ありと云り物ぬ

字鏡増字目下有和名抄ハ胆ヲ波閉乃古ノ有テハシラ訓ナニ胆ハ蛆ト通フ小見ノ蝨ヲ指テ仰向テオ寺ノ虫ハキナチ虫ヨ兩サヘレバウサクトムテ指ヲ皆動スハ蛆ツイナルヘシ書紀ニ虫流ウジタルト訓リ古事記此ヲ字多加礼トアレ依レ訓ニ鳥虫ナド物ニ集ルチタルト云人カカリト人ニモイヘリ

とつり 蝇の後脚を爪めて押さるといふとめて、滑り といふと

棕櫚の葉を蝇うちへたゞり古き事と日る童蒙元習葉長十七年刻本あり

直ちの抄檢櫛ニ葉ハ蝇うちり云洛陽集蔵之の蝇うちりて棕

櫛ノ音をぞとく有知 又一代男卷四東國浪人のとけり今時大

よむやとて 蝇とり 蛛を仕入とつり昔は先年とまやり

何りきといふ 蛛ハ本草に 蝇虎といひ大小教呂ありて 其居る如

從て色もさめくとよすむる 綠色ありいつまもよく跳りて 蝇を

い合ふれを教に飼ふて 印籠あゝの 小紙巻物よ入きて 持れり

をい捕らるとつり 又虫繪とて種々の虫をうきつり一枚絵あり

虫鏡増字目下有和名抄ハ胆ヲ波閉乃古ノ有テハシラ訓ナニ胆ハ蛆ト通フ小見ノ蝨ヲ指テ仰向テオ寺ノ虫ハキナチ虫ヨ兩サヘレバウサクトムテ指ヲ皆動スハ蛆ツイナルヘシ書紀ニ虫流ウジタルト訓リ古事記此ヲ字多加礼トアレ依レ訓ニ鳥虫ナド物ニ集ルチタルト云人カカリト人ニモイヘリ

蜂の目

池北偶談 三謝皇人
晞髮集有粵山蜂
分日記云甌粵之南某
山其民老死不知歲曆
惟戶養蜂四時且暮
悉候之蜂之分也其日
必言人家無大小貿易
皆趣成之事亦及辨
則以待後之今日至於
婚嫁與作皆候焉蜂移
之家若隣若僕無遠近
運相報不敢隱有取者
至其地也年書蜂分
之日凡百有奇婦取曆
驗之皆黃道紫微各月
德吉曜也其不分者非
凶星則常日也物性之靈能通造化如此

小兒これをきりぬき 蠅の脊よ糊めて貼付てあめあまを試あり
いつより けりやいささかおもしろ

蜂ふき今小兒ハ蜂が刺さる子哉とらうといふも 蜂ふきし源氏物語

大井の宿りしが柿をいしぬをふくと打あつたつとちうき

いへむる葉の下めもちぢくともおし 蜂の面近く飛時恐きてうそ

ふきすくふ物いふあり物をいふは一向よしそを蜂拂と

いふめゆり 守武独吟辨芸や蜂のありともきくそんうそ哉

ふゆのぞけふげぬきう雄ををむおぢ人のうそ吹山や麻の角哉

さしを飛鳥のむし月のさ油粉よみのささひた乃のせりうそ哉

あふふ人とうそを吹て世話焼草いぢのうそをいふはあふふ

いそや蜂花よのるふ飛鳥や 神代紀の嘯字をウソクと訓り

ウソクあをあふウソとも虚き意めて管あとの蒸を用ひて

吹けがしをうそといふも同じと飛鳥や今いふ口笛し狂言記拾

遺の内よあふ杖を食ふも考ふそ哉吹とけがしをいふも 唐詩よ

獨坐幽篁裡 彈琴後長嘯さういふも希有の事とも思ひぬい

鄭明送が秕言よ嘯法不傳久矣頃得嘯言嘯有十二法云善嘯者可

以憾百靈致風雨按後漢書趙炳嘗臨水求渡船人不知趙炳乃張蓋

坐其中長嘯呼風乱流而濟此其驗也今江東舟人每喉中作声信

謂之呼風亦嘯之遺意と何るは扱まはるるは爲す御所似し如爰は蝦夷
 人かかるといふは其をユカフクといふは其家郷の言に似たり
 くのりしぞすまみちのたをぞよおとせ給秋の秋の月おほく
 似しとあり 今もさういふとあつたやさんぞ道徳がまらうのたれまらめを
 そのまらめをい
 あし虎嘯谷風至といふは巢居知雨穴居知風の意とて人の
 所多ありんぬをあらわすも嘯言ハ續百川学海癸集に収めら
 序に孫登より阮籍に傳はりて後嘯法湮びたりとあり其書作
 者を著るは唐人とて都穆といふ者の跋あり
 墓をどまといふハ氣流を物を吸ふそのたれをヒキといふは源平

予弱年ハ以書奇ニ
 窓あり其障子ヲ開
 テ見レハ大ナル墓ウツ
 クマリ居テ施前後ヘ
 トブ何故トモ知テス彼
 タルニヤトニハシ見レニ
 墓モ背ヲ高ウメ少シ
 ツ跳レテ其終リニテハ
 見ガリシ其後人ノ語ヲ
 聞ニ施ハ墓ニ氣ヲ吸ハ
 レテ次オヨリ遂ニトラ
 ルモノトゾ

盛衰記ハ墓の息天は上より下へ流あり今人々を蚕の息といふは
 墓の息といふは流あり 蝦蟇を捉て鬪り殺し地ハ小坎成
 掘り車前草を襯て死す そのうへをよるを車前草
 ひて小兒のその周りに居てくまのお死をわくおんむく
 活といふは いひて死すは須更ありてかす蘇る此こと
 古き事なりんといふも詩茶苴の郭璞が疏曰今車前草大葉長
 穂江東呼蝦蟇衣 陸璣草木疏云車前草一名蝦蟇衣也 本草啓蒙云車前カイル部
 仙 漢名を挙て賢蟇葉 青蒲 これバ陸奥みづカイルといふハ
 彼兒戯より名づけて漢土の名は胎合せあり 蜻蛉日記中卷山

東の東半... 寛永... 貞享...

いふに後... 奇功のあ... 喜感伏于下... 續日本紀... 郡正倉院北畔... 著聞集... 蝦蟆... 方ざりて...

東の東半... 寛永... 貞享...

或は... 蝦の戦... 親重... 寛永... 軍場... 蛙... 蛙... 蛙...

雨蛤ハイカ、カ班文ナリ
青色ナリ青蛙ト云ヘシ
タルニ本草啓蒙トモ
モ青蛙ハ車物蜘蛛アリ
テ溝中ノカハルトス按
ズニ泊宅編宋本收在
讀画齋業書中山間小
蛙一名青鳥飛走竹樹
上如履平地与葉色無
別每鳴則雨作又一種褐
色而沃居名旱渴晴
則鳴鄉人以此卜之ト
アリ

あま打殺して吊ひし蛙の合戦常ふあはれびしその結
朧録あはれ記しり河まづも蛙を雨を呼ぶし百物
艸子今もあはれあはれあはれ死に臨むもあはれしむ
らひり一代男双子秋のふばか筆此書のも里れん屋縁
かか河まづもあはれあはれしり○又醒睡咲唯有の條大各の
前めり産卵のひしあはれあはれ何の子細めそれ不
眠をともあはれあはれ昔より春ハ蛙が目をかきや
ゆる目あはれあはれや我らのやうなる河まづも目を
蛙のよみ今も目のあはれあはれ細はるあはれあはれ
有按

宋人ノ東粵雜録

吳人盛夸鼃味之美
坐有閩右士人大噉吳
人不能平余從旁為解
紛漢東方朔言漢都
涇渭之南所謂天下陸
海之地宜姜芋汝水
多鼃魚顏師古注鼃
似蝦蟇而小長脚人亦
取食之漢唐皆都雍
東方朔言水多鼃魚
是漢都人食鼃也顏師
古言人亦食之唐都
入食也漢都不惟食
是宗廟獻亦用鼃魚
光傳霍山曰丞相減
宗廟羔充鼃可以此罪
也非宗廟薦獻而何
曰天犬喜曰今日蝦蟇
價增三倍矣
○又韓退之答柳州食蝦蟇詩下結句余雖不下喉近亦能稍

此後ハ春苗代のゆより蛙おれし蛙を目を摩スルるあはれあはれ蛙を
食ふ

処ありあはれあはれ鼃あはれあはれ浮上ハ蝦蟇
人の眠る風情あはれあはれ

俗語あはれあはれ彼あはれあはれ宗監があはれあはれ
おはれ其角が附本局のあはれあはれ雨あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
和漢三才圖會ハ豹尾草

原野多有之小兒用之釣蛙哉者 蝦を食ふし 括異志陳宏泰家

富於賤有人假貸錢一萬宏泰徵之甚急其人曰請無慮吾先養蝦

蟇萬餘頭鬻之足以奉償泰聞之惻然已其償仍別與錢十千令悉放

之江中 天祿識餘韓退之答柳州食蝦蟇詩云又云按周礼

○又韓退之答柳州食蝦蟇詩下結句余雖不下喉近亦能稍

○六帖 光俊姓の...

古事記 天尾羽張神ハ
伊弉諾大神ノ御子
此神ノ本河上石
屋其河上ノ神也
居玉ノト云傳也
水ノ邊 其中ニ砥
刃ノ神ト云此神ノ如珠
河水ヲ塞メテ石室ニ
坐ニ縁ニハ三ノイト
オカニテ說サレド
オカニテト云
オカニテト云
オカニテト云
オカニテト云
オカニテト云
オカニテト云
オカニテト云
オカニテト云
オカニテト云
オカニテト云

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

堀氏所掌蛙鼈之属漢書霍光擅滅宗廟無免蛙古共蠶以為上食といへり

蜻蛉を捕 蛛の灸 蛛の腹切 あゆの志や

蛭がり異本四季物語石山寺此は巻物納めらるるの廿日あり
あむ有るつとめい治部のおり書さうらうの人のあし
そのあつあつしめ石山めさうでぬえさめい蛭いそらう
まぬのうつりめはは入て宮のうちめまきばさうらのほまあ
は法がのそとめつまをさめりてはるおの星とよめさ
しらほ思ひつちりのぬえれど此中おれえあれを色とやうめ
おのむりめはらおれりておとまらあまいそらめれぬ
そとめあしきうはらうさぬまよ、草を振りぬめ、百和の香を

ぬえれど、おの茶おれい心何んまき虫のうれしし、くささぬの

蒸の紗あつ貼るは、秋夜長物語色の、草をたおまて

まよたのあちやらん、蛭を入てゆの、さうら、光あさうぬま

云々魚腦ハ魚鮓しく魚の脳骨なりこれと煮て

現物のやうな草は、秋夜長物語

秋夜長物語、青竹の筒

よ蛭を入る、蓋をきて、おれ光あつ、さうら、蛭合戦を

狂言吐、お月の本法、さうら、さうら、蛭の集り、さあ、ぬぬを信

き、金浴の蛭、さうら、さうら、さうら、さうら、さうら、さうら

い、おれ改入、さうら、魂あて、今、軍さう、有さあ、さうら、おれ、ぬぬ

救千、おれ、さうら、川、面、おれ、さうら、或、鞠の、大さ、或、さうら、さうら

椋が丸くく、空をまひあがり、さうさう有て水乃うへ
まはるゝ、あつとく、とけてなづれ、と幾も、ゆるゆるなりけし

正章千句、繻細をのちか、夏川、虫こゝ、いふ、な、浪、み、響

外、山、井、火、廻、い、う、漸、多、う、う、字、法、く、移、る、は、以下 和漢三才

系、余、本文、深、空、ふ、き、ぞ、 石山寺の溪、虫、多、い、今、う、あ、と、と、と、 幸、け、ま、う、六、大、あり

此、郊、を、虫、今、 呼、北、勢、多、北、栢、南、八、供、トモ 江、が、漸、み、多、う、その、河、の、ひ、を

群、が、り、飛、カクミ 十、丈、づ、り、火、燭、の、し、又、数、百、集、り、て、塊、を

い、何、り、大、く、見 芒、種、の、後、五、日、より、夏、至、の、後、五、日、の、間、十、五、日、づ、り

茂、盛、の、時、を、今、 後、下、り、て、字、法、何、ま、多、う、と、い、ふ、夏、至、小、暑、の、間、を

宇治拾遺、貫之、方、東、人

二似、セ、テ、ヨ、ル、故、ト、テ
ア、上、照、や、虫、ハ、 尾、ハ、 火、ハ、
著、テ、小、人、魂、ト、モ、見、渡、ル
カ、ナ、ヤ、尻、ト、ハ、今、昔、物、語
ニ、ハ、 類、ハ、猿、ニ、似、テ、ト、
イ、ハ、 ル、ニ、テ、今、モ、イ、フ、言、シ

さ、の、り、い、は、る、今、 後、下、り、て、字、法、何、ま、多、う、と、い、ふ、夏、至、小、暑、の、間、を

衆、多、社、及、水、上、林、虫、多、く、今、 一時、乃、壯、観、を、今、 云、り、東、國、の、下、野

侍、姫、を、名、今、 下、り、て、字、法、何、ま、多、う、と、い、ふ、夏、至、小、暑、の、間、を

膠、草、首、承、写、則、驚、馬、飛、可、得、小、兒、多、称、馬、蜚、取、為、戲、以、小、籠、盛、之、挂、於、凡

簷、或、樹、杪、使、之、朗、吟、高、噪、庶、不、寂、寞、園、林、也、今、 の、ま、を、見、今、 ち、掉、今、 する、今、 心

不、今、 蝶、を、取、今、 ぬ、今、 故、今、 あ、今、 唯、今、 終、今、 入、今、 づ、今、 鳴、今、 する、今、 事、今、 を、今、 ば、今、 終、今、 の、今、 り、今、 め、今、 け、今、

鳴、今、 の、今、 め、今、 や、今、 忽、今、 ち、今、 死、今、 せ、今、 ぬ、今、 蛸、今、 脱、今、 ち、今、 蜻、今、 螬、今、 の、今、 出、今、 め、今、 河、今、 を、今、 蝸、今、 と、今、 成、今、 け、今、

我、腹、蝸、今、 虫、今、 の、今、 指、今、 め、今、 徒、今、 然、今、 を、今、 腰、今、 け、今、 上、今、 の、今、 我、今、 ち、今、 有、今、 ち、今、 あり、今、 動

の、今、 虫、今、 を、今、 真、今、 だ、今、 ち、今、 小、今、 鬼、今、 を、今、 れ、今、 を、今、 ち、今、 ち、今、 西、今、 へ、今、 ち、今、 ち、今、 あり、今、 又、今、 西、今、 へ、今、 ち、今、 ち、今、

又散木集女即花ナマ
 下蟬カカニクツク
 ホウシモカク聞エラナ
 千代抄

名付し中モコケの蟬モコケは人土より少く樹木に脱モコケるを蟬脱
 此類は室蟬を脱る物より能遊は西武が句かしく成を果して
 何れもこのしるべき得なりかきぬ心は生るあり後あり又草が
 脱モコケるにありて死す秋の蟬とて生るも死すも法くは同し
 小野宮古徳徳家の謎合を脱りてありて祈りの時を脱りて成
 ニツアて法く脱るは生るは死すは法くは同し
 蜻蛉日記は八月つづきの日雨
 おでたもく帝京景物畧云蜻蛉之類三大而青者曰老青紅而黄者

曰黄兒赤者曰紅兒好擊水而飛々童園竹結綵線綱曰絃水次循羣逐而
 撲之名呼以祝曰猶栖撲著曰絃著得一日一采以色玩如花也これハ
 此類の小兒蜻蛉を擲るよ人まらせやうつとてさうやうのやと
 いふを同じ和漢三才圖會云小兒維雌釣雄為戲つるはこれに
 いふことばは蜻蛉を擲るよ人まらせやうつとてさうやうのやと
 といふがめく黒く志で紐乃色あるものこしつとて胡黎の一種と
 やんぬをよんぬといふ人かこの総名あまきどもその内珠ま
 たきあまが色青きを名付本草め蜻蛉は総名あまきどもこれを
 拵て名付るが懐子集五立とていふものやんぬとせむは

世に伝はるるやして又神に付墨う尾花よかひとんが犬子集白紙

物を思ひくおひりれ 一向は白五十 貞徳あり 虫中 蜘蛛よのほけや

あかりて ○担籠ゆは平倭方相は此家やいぬとらふ如き

ほふれは倭方よまれ 蜘蛛 蜘蛛よあまのやいふよあまのきびい

ひびよきいぬのぞかえ珠のやど 蜘蛛 蜘蛛をいふよ

を山中樹間よ網を結ひて居常此蜘蛛のや 蜘蛛 蜘蛛をかき

本州の花蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛なり ○又土中よ三寸許の穴を堀り

蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛あり 蜘蛛 蜘蛛の巢乃増あ 蜘蛛 蜘蛛の土の上よ

蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛油 蜘蛛 蜘蛛油 蜘蛛 蜘蛛油 蜘蛛 蜘蛛油

蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛の腹を破るもの 蜘蛛 蜘蛛の腹を破るもの

蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛の腹を破るもの 蜘蛛 蜘蛛の腹を破るもの

○又あまの 蜘蛛 蜘蛛あり 蜘蛛 蜘蛛あり 蜘蛛 蜘蛛あり

蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛の油を離 蜘蛛 蜘蛛の油を離

蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛の油を離 蜘蛛 蜘蛛の油を離

○又小兒水馬を 蜘蛛 蜘蛛を 蜘蛛 蜘蛛を

餌之則擒抱不脱釣至案几而不知也

虫撰 虫吹 促織 鈴虫 松虫 虫亀 虫屋 麥楷籠

虫を種る 冬蝨を脱 虫の油を髪よぬる 蓑虫

蝨の熊野参 あり此合我 蝨塔 あり此蚊 蚯蚓 小兒陰腫

小虫目鏡

源氏野分巻とていふおろきとせ給ひて虫のいふのよきおろきのおろき
りりて四つ入つておろきおろきの草むらよりけり後くち
いふをのりておろきいふ虫を飼ふおろき虫を採るておろき
堀河の時時おろきおろき著聞集嘉保二年八月十二日殿上人
をのりておろきおろき向ひて虫をえとておろきおろき
ありておろきのおろきおろきおろきおろきおろきおろきおろき

源氏野分巻とていふおろきとせ給ひて虫のいふのよきおろきのおろき
りりて四つ入つておろきおろきの草むらよりけり後くち
いふをのりておろきいふ虫を飼ふおろき虫を採るておろき
堀河の時時おろきおろき著聞集嘉保二年八月十二日殿上人
をのりておろきおろき向ひて虫をえとておろきおろき
ありておろきのおろきおろきおろきおろきおろきおろきおろき
源氏野分巻とていふおろきとせ給ひて虫のいふのよきおろきのおろき
りりて四つ入つておろきおろきの草むらよりけり後くち
いふをのりておろきいふ虫を飼ふおろき虫を採るておろき
堀河の時時おろきおろき著聞集嘉保二年八月十二日殿上人
をのりておろきおろき向ひて虫をえとておろきおろき
ありておろきのおろきおろきおろきおろきおろきおろきおろき

年中
行事

花のうらみはあまのむすむすをまはせ
花のうらみはあまのむすむすをまはせ
花のうらみはあまのむすむすをまはせ

鳴る虫を竹筒のうらみはあまのむすむすをまはせ

鳴る虫を竹筒のうらみはあまのむすむすをまはせ

鳴る虫を竹筒のうらみはあまのむすむすをまはせ

毎至秋時宮中妃妾輩皆捉蟋蟀閉養小金籠中置枕亟畔聞其聲

庶民家皆效之蟋蟀を捉織めて供養せしむるを
庶民家皆效之蟋蟀を捉織めて供養せしむるを

たつたおの今系作めていひはれ別俗名を多し一程形の大

あつた系作めていひはれ別俗名を多し一程形の大

油胡盧といふは蟹の形似り以上本州家の説なり今按るに和名抄に

載るはあまのむすむすをまはせ
載るはあまのむすむすをまはせ

たつたおの今系作めていひはれ別俗名を多し一程形の大

あつた系作めていひはれ別俗名を多し一程形の大

漢土あまのむすむすをまはせ

表中郎文集より陸次雲の闘將軍傳より何の賭をおかす

うけを係負を争ふあり五雜俎に張廷芳といふものあり

家産を破るはあまのむすむすをまはせ

京景物畧凡都人聞捉織之俗不直問巷小兒也貴遊至幘厭車豪

右以銷其貫其荒其業於亦漸衰止惟嬌蛇兒女聞嬉未休

其大... 續千載集... 後三位氏久虫... 資季...
 以氏穰飼之... 稽... 釋... 者... 松虫...
 淨... 松虫... 琉璃瓶... 入... 志...
 其... 稽... 用... 質... 昔...
 淺商... の... 貞享四年日記... 六月十三日...
 齋... 者... 所... 四谷... 湯... 神田... 町... 三... 子... 氏... 者...
 お... の... 一... の... 者... 氏...

虫を種... 法秋の... 小瓶...
 中... 餌... 飼... 餌... 飼...
 聖年五月... 初... 色... 包... 縮... 子... 蓋... 一... 日...
 虫... 中... 卵... 中... 微細の虫... 生... 出... 日... を... 守... ぬ... せ... ち...
 瓶... の... 内... 他... の... 蓋... よ... き... 袖... 々... つ... ぐ... ぐ... 々... 々... 陸... 々... 々...
 水... を... 洒... ぎ... て... 入... ぐ... ぐ... 茄子... 瓶... の... 末... ぬ... る... 虫... や... っ... て... 死... 々... 々... かく...

日本書紀... 卷... 第... 十... 二... 卷... 第... 十... 二... 卷...

此虫(松虫)年々後(松虫)多(松虫)出(松虫)来(松虫)る(松虫)物(松虫)也(松虫) 松虫ハ此虫のつめて

帝京景物畧 倭織秋尽則尽 今都人能種之苗 其鳴深冬

其法于盆養之虫生子土中入冬以其土置煖炕日水灑綿覆之伏

五六日土蠕吐動又伏七日子出白如蛆然置子蔬菜仍灑覆之足翅

成漸以黑匝月則鳴々細于秋入春反僵也これと似る法あり水

洒煖む松虫の卵を取るは寛政七年乃以

法あり何人考て始むや云抄より備前を人物法より松永澤と

忠松虫を飼くるとも養ひらまは三年中生るり況や

人間日月の養うる人も長命ありとも疑ふは松虫といふ

金替選食記秋時
養蟋蟀至燈夜則置之
教興山燈内養樂既羅忽
聞蛩声二三月上云

古華老賢一語
古華老賢一語
云松虫の三年生

松虫の三年生鬼哉

冬蛸を糸結法などに結むて遊ぶ促織志々蝦蚱之種三俱不鳴青翼而

黃身嚙近而飛則見其叢羽或紅馬或黃馬云嬉者服藪糸而提之

使飛不止以視其叢羽と金瓶梅十八回吳月娘孟玉樓潘金蓮并

西門大姐四個在前廳天井内月下跳馬索兒とあり馬索ハ蜉蚱も

跳蛸を籠羽を俗語家が我素を跳上の聲也

埃囊抄卷八朝生暮死蛸と云ハ童謡の打鼓をかり舞踊ぬ蛸也

背虫を童謡にゆりしらと云ハ萩の枝にゆりしら付く虫といふ

青蛇虫長尾成て羽の生るる成りてはひと谷付て頭をぬりて

蜘蛛は髪の上より者なる実の蟻を吐き出さるる淮南子曰朝蟻不

知晦朔と云く許慎曰朝生暮死虫也生水上似蠶蛾と云くこの

西の今世に膏泥を吐き出さるる蜘蛛田舎の鬼女理かたけ戯しを

蜘蛛の形あり其朝蟻ハ蟻蟻なる所抄子紙を吐き出さるる形と云

磯娘似て高尾細尾二條あり雄は雄あり雌は雌あり水邊に

公家此庭樹あり居るに形少しあり虫引豫めてきりて阿

あてきりてあてきりてあてきりてあてきりてあてきりてあてきり

あてきりてあてきりてあてきりてあてきりてあてきりてあてきり

○古筆考 隣女語言草庵集連歌ニ古キ筆キリクストヤナリヌランハ阿句壁の中ニツフニオサメシ梅月堂宣阿カ注ニ

古筆考 出処未考 清少納言の條 おめのうみはれいおをふ似てと云く

晋千宝搜神記云 日朽草為菴也云云 前句ノ作者草字筆ノ字

ニ似タルアヤマリ見テ セト見侍ルハ公句 前句ノマニ付ラダルト

見エタリト云リ今按ル ニ前句ノ作者草字ヲ 見誤リタルニラス 往古

ヨリ既ニ古筆ノキリク ス トナルトイヒ未レトニエ 秘記抄ニ筆ツ虫秋モ今ハ

ト浅キフニカタイロニナル声 ヲルナリ筆ツ虫菴云云 ナリ古筆ノナルナリトアリ

以上余按ルニ此説モイカ アラン秘記抄ノ文ハ古筆

ノナリタレナリナガニアラヌハトモアレヒタル退筆ノ形ヲオキリクストイハオウツカラキタルサマニ聞エハヨリコハ聖巻ニ長フナリタルヲスキニナレト

蟻の態野あり長嘯子虫のあ合あてけおきりてあてきりてあてきり

あてきりてあてきりてあてきりてあてきりてあてきりてあてきり

あてきりてあてきりてあてきりてあてきりてあてきりてあてきり

あてきりてあてきりてあてきりてあてきりてあてきりてあてきり

トモ同ホトノナレシ
又華為贅腐性カ
ノ者ナリ
...

...

○蝗螂

散木集連歌人タマタ
クニテ観音寺カタヘマカリ
ケルニ引カハキコトノ外ニ
チイサクヤセテエヒカサリシ
カハイホウニリトツケテ味
フホトニカタハシサマニ倒レヌ
ベクヨホヘハウシロサマニアエ
ハセテタフスト人々アルヲ
聞テクヒホソクホシリシ
テタチホレツクイナゴマヒ
テミノオツルナノ今イボ
シリトイヘ古ハイボウ
シリ又イホシリナト云
ニヤ付ウハイナゴマロシ

他のむら... 余北而行北皆... 馬蝗一名玄駒... 廟歳五月君羊... 蝦有黄色者小而健... 輒昇帰穴中喪乱之世...

轉^ル同條云人有掘地得蟻城者街市屋宇樓堞門巷井池有條

唐五行志開成元年京城有蟻聚長五六十步闊五尺至一丈厚五寸至

一尺可謂異矣蜂亦有之均^ク蟻の塔その修め^ルてお^レり次年も又

蟻集^ルるの^ルも帝京景物略南海子の條海子西北隅歲清明日蟻

億方集疊而成丘中一丘高大旁三四丘高各數尺竟日而散去今土人每清

明節往群觀之日蟻蟻墳^ルに^レ付^テ觀場^ヲ出^ルる^ルあり皆偽造あり

法^ト土^ノ砂^ヲ糖^ヲを^レ和^シ塔^ヲを^レ造^リて蟻^ヲを^レ栖^マし^ムる^ト

物類相感志九月蚊子嘴生花^ノ代醉編^ノ古諺有云霧^ヲ瀟^シ而^レ蟬

螿^ノ枯露^ヲ下^リ而^レ蚊^ノ喙^ヲ折^ルる^ト八月の^ノ蚊^ノと^クも^ノ喙^ヲ折^ルる^ト前

○蟻

あり^ハ初^メの^ノ蟻^ノの^ノ蟻^ノを^レ刺^スる^ト人^ヲを^レ刺^スる^ト ○[○]蚕^法は^ハ蚕^ノの^ノ主婦^ト云^ハ

妻^方よ^もま^しき^とい^へる^トを^レ蚕^ウう^ルに^ハあ^らわ^ぬ凡^ル虫^ヲを^レ雌^チ右^ノの^ノ法^ト

似^タ語^{アリ}五^種類^ノ田^元鉤^狹而^レ長^其夫^人富^彦国^女弟^也濶^而短^石

曼^卿戲^目之^為龜^雀夫^妻の^ノま^まに^ハ蟻^ノの^ノ蟻^ノの^ノ蟻^ノ

蟻^ノを^レあ^らわ^ぬの^ノあ^らわ^ぬに^ハ土^中に^ハあ^らわ^ぬ蟻^ノの^ノ蟻^ノの^ノ蟻^ノ

わ^らわ^らる^トあ^らわ^ぬの^ノあ^らわ^ぬを^レ奪^フ蟻^ノの^ノ蟻^ノの^ノ蟻^ノ

あ^らわ^ぬ下^ノ直^ニあ^らわ^ぬの^ノ虫^ノの^ノ談^合の^ノ中^にあ^らわ^ぬ住^居の^ノ蟻^ノ

あ^らわ^ぬの^ノ蟻^ノの^ノ蟻^ノの^ノ蟻^ノ五^種以^テ我^集目^をを^レあ^らわ^ぬの^ノ蟻^ノ

蟻^ノの^ノ蟻^ノの^ノ蟻^ノを^レあ^らわ^ぬ人^をを^レあ^らわ^ぬ本^草原^始雨^則先^出晴^則夜^鳴因^知

陰晴故俗有地龍之称その声を花鏡
卷二自來音の條 蚓笛といふ又小兒

の陰腫ととつらふは蚯蚓の毒ももれとて蚯蚓を捕へて洗ひ放つ呪

ふあままあま鎮の府志今小兒陰腫列以為此物所吹以塩湯浸洗則

愈まあまと陰を洗を誤りてをあまあまを洗を効あり

歌又笑林は幫間を曲を又會呵呼膠す

他の條は燕子泥を啣して巢を他ま中は蚯蚓ありて憤りれ

は燕子云我專怪你呵人家卵膠とい卵は陽物あり呵卵膠とい

まままままま幫間等が下より毒を吹をまままままま

ままの陰を吹をまままままま

虫めが 洛陽集 虫めがねむの清を虫のかま辰むらし那ら

虫の行正續山井よかりをそれ蚊のまめの虫

巻がね種寛水屋の月や虫めか子安信西洋の頭微鏡ハ言價

あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

闘鶏 野郎遊女が雛合小鳥合鴨合かりの子

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

大雄鷄トウキ喙為已雜著鈴金距アキネ競令鬥之トウキありこ是左傳トウキ季郈トウキ鬥鷄の事トウキをいひ李氏トウキ及其羽トウキ郈氏トウキ為之金距トウキと有此法トウキなり和名抄トウキ玉燭室典云寒食節トウキ城市多為鬥鷄之戲トウキ
闘雞此間云此利何也台記トウキ天慶元年三月四日トウキ鬥鷄十番有之トウキ後世も三月の節物トウキが殊トウキに好トウキ者トウキありと定トウキりし事トウキは唐の明皇本邦トウキに相摸トウキ入道トウキと云れを好トウキめり今禁中トウキめり毎歲三月行トウキる日次紀事トウキ云禁裏清涼殿南階前トウキ有鬥鷄其雞諸家中トウキ雲客被出トウキ之仙納トウキ弥市預此事決勝負是亦稱行事トウキ仇諧トウキ御幸トウキ云鷄合トウキ之夜トウキ分トウキは三月三日トウキより春トウキの成トウキといふ説トウキをトウキ集トウキる節トウキ令トウキは平家物語トウキに三月ありと

斗トウキ事何トウキり礼記トウキよもこの事何トウキり京華トウキにありし事トウキは雞トウキをトウキ置トウキ居トウキはれトウキたむトウキはれトウキたむトウキ闘トウキありと云トウキれを闘トウキ鶏トウキと名トウキはく秘傳花鏡トウキ云一種闘雞トウキ似家雞トウキ而高大勇悍異常諸鶏見之而逃トウキ其以冠平トウキ爪利者トウキ為第一トウキ每闘雞トウキ至死不休好事者畜之於深秋開場賭博トウキ先將兩雞トウキ形狀審得大小相當トウキ方放入圍場聽其角闘每以負トウキ而吐トウキ走者為敗トウキ養法闘後須用長莖トウキ鳥翎一根挿入雞口絞出口内惡血トウキ安養トウキ五七日再闘則無損傷之患トウキ雖全勝者亦不可使トウキ之連朝トウキ狼闘草雞雖雄多望凡トウキ而靡トウキ云草雞トウキハ常の鶏をいひトウキあまトウキむといふと暹羅國トウキにありし説トウキに相トウキ同トウキあり暹羅トウキハ南天竺の内トウキめて唐山

より西南の方より莫卧雨の属國より降りて此をニヤム口又
ニヤム口と呼ぶ所のは是なりしが定まらぬ外國の鶏を常々
食料とせしがいつと船長が我朝の鶏よりよく治りしめや
されど古書ゆゑ之を大和本草の暹羅雞紅毛雞と外と云り
本邦の鶏を対しし西語大體は昔の芝居の詞芝居の詞と云ふもの
鶏合を好むと云ふは裁と云ふ芝居の詞は慶安五年に停止
と云ふは芝居の詞又男子
のよみは五元集園鶏句合より多くを云ふ及の鶏行奉判云
名をよむ者もたあつては鶏をよむと云ふはめづるの志なり此の
何れをよむ人なりよ言ふは昔の唐土をよむ人なり翅は薫物し

低紅粉化粧して花をよむ人の心をなほめし味をよむれを後
法度よりあつて多しこれ故なりぬきしは寛文延宝の事
みや薫物凡紅粉ハ羽衣金距よりなり風流ゆゑゆれと遊女乃
戯れに似たり昔はよむ事よむ事知る昔は持治
を三月の男子鶏合にて鶏を拵けて合々として又貞享のめ
志ありし見えて日本歳時記の終めより終り正徳元年外五月
廿一日近き以町中より鶏合々金銭はしり黨々町人等數十人組合
屋敷方より徘徊する由沙汰おのいふは折々を仕るまは福者之
小鳥合々著聞集々寛治五年十月六日殿上人所伝の遊口小舎人

左をとりしりちて小名合の事有りり公卿ハ多ク其の殿下ニ位
中殿よりとりしりちて殿上人を頭中將仲実録長右方中將
宗通相臣以下夏の袍の久指費ををとりしりちて殿上
とありて朗詠今様猿出を有りり古き事跡ありり少くハ
後小院へまゝをらぬありり鴨合ハ百練抄云高倉院兼安三年
五月二日於上皇御方有鴨合事近習月卿雲客及北面下臈等分左
右為念人諱起兼日之義為當時壯觀有勝負舞此時の事著すこの鴨
字を鶏字め他多し誤なり又尺素は五月五日賀茂競馬并深草
祭上下之見物鶯鴨之闘鳥可有此時飲と鴨合ハ五月二日とありり

進りれど和名抄ハ鴨和名比衣土里といふ此多聞と我々さればこれ
鴨字を漢字とす但鶯鴨とあるは鶯合の事と鴨ノ啼声を
合きしれども云へれどさういふ著書を考まば声を合するは
ゆるい物なり又著聞の言内卿家降を此にむしり萩葉と
いふを子息侍從隆祐とありりをけけるをとりしりちてやまは
といふ多しなりありりる萩葉乃萩あり萩葉端山と名を名付し
ありりしなりヒヨドリとかありりけりありぬ文字を鴨字と誤りし
を又ありり字とありり同書ハ後久我右大臣家ありりありり
鶯此有りり家降とありりしりちて萩葉ノ雜りや

吳志は孫慮於堂前作闘鴨欄とあり又闘鴨の詩賦あり後
 あり五雜俎に古人有闘鴨之戲今家鴨豈解闘耶といへる家鴨も
 あひうしおりの野鴨を水中にけりて闘ふとあるまじき今この
 鴨合もある家鴨なる著聞は鴨合の事を記しつゝなかり屋
 の東北砌に東一間ありてこの庭の南をこゝとけりかり
 庭を仮屋あり鴨屋にかり今いふけりるることすも卵を
 かりの子といふ是れかりの子とこれ子といひこれとかりの子
 といふをいふは志のここの鴨合をあるはありと知れり五雜俎は
 闘をかりぬといふことありても互に是れ闘をかりの蜻蛉

凡鳥ノ卵ヲラカニ大
 キヤカナルハ雄ホソヤカニ
 小キハ雌ナリユハ誰モ
 方云リ雄ハ卵ノフトキ
 方ヨリ生ル雌ハホソキ
 方ヨリ生ルト塩尻ニ
 イリ

日記より卵の事記すに五月廿二日卯をいづせんともあり
 けりよはてしなく此系をきくおまびとておまびとておまびとて
 初産するはまばいといふがかきありけり源氏権左衛門のあいつ
 切はかき産はらんてわんたか花あやめうよまはるりて
 産するはけりけりおれどさうさうしかひのこをぬい
 かつにまきまきま伊豫物産古金六枚ありての子といふこと
 りる何れもまき産するはけりけり産するはけりけり産するは
 るの卵たまたま産するはけりけり産するはけりけり産するは
 産するはけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

かりのまをそれし卯よあしの家鴨を近き流をものり食らぬ

このあしよ今夏夏月の物候とし用ゑと京師より記さる京師を

とて用ゑし専ら文化の流より流るしよ人の物あか川よ

流るあしひの河さかただげありり物候をあらた

あひ鴨とて食らふやの

鶯を合をえを免秋波集よさをかへん春ぞかきめ

鶯れふしひさち我啼ありを又多れ二羽をさる

鶯のあつせれさるらまの物候とあつ啼声を合せし

鶯あし廿二鳥職人鶯飼の放花羽つせたま花のさるるあしを

おりの葉しあより何れさむ花の名も大葉をいひて物候とし古あまおほくとし

大羽すまのりし分格たあありり物候とあつ啼声を合せし

ろしすまのりし分格加多言よ鶯の子を巢よりあつてよ

をれ菴よなきて飼をぞて侍色は程れくは物候とし

は声よ二光を吸をよしとてり正章独吟うきひしよ三皇

のは代を初まるとおまの九判をまよ月日候としや物候とし

は素よ鶯れ珠あよ啼るよ二光ありとて声の何やきしとて雅遊

醉狂集よ鶯の月日星とあつ物候とし二光と稱しとて貞室う片

114
鳥の鳴き声
鶯の鳴き声
鶯の鳴き声
鶯の鳴き声

言よ月日早はあくととれあせうとて同じ言あきなり

いかにあてはるる河の影相を山人山とてや

此時過ぬれをそはあき声五意あせうとて三光鳥種あり

その向言あは三光を呼ぶ日光山乃三光鳥八月日星

とて山落八月日星々々わはれ又菜鳥八月日星とあけとて

三光鳥の名あり此鳥を三光とては昔あてたはれ

三廻いかに呼ぶとてあき河の影相を山人山とてや

著聞集よ三光中納言空言いふとて家降ののりてはれ

かゝる老とてあきとてはれとてあき河の影相を山人山とてや

下学集よ三光中納言空言いふとて家降ののりてはれ

啼声し伊勢かいて三光といふとてはれ啼あてとてはれ

あき異詞とて和漢三才會よ春月能轉如言比志利古木利

河の山といふとてはれとてはれとてはれ

あきといふとてはれとてはれとてはれ

あきといふとてはれとてはれとてはれ

あきといふとてはれとてはれとてはれ

あきといふとてはれとてはれとてはれ

あきといふとてはれとてはれとてはれ

鶉の鳴き声を聞くに神をさしり鶉合やしてぬらん又鶉の鳴き声は

鶉の鳴き声は 詩の合のやうな鶉の 又鶉の鳴き声は

七言の詩あり 鶉の鳴き声は 七言の詩あり

抑揚多きなり 岩翁が若き合才二 抑揚多きなり

月二枚鶉合を合はし の多近年 月二枚鶉合を合はし

大徳侯競ひて 是を飼ひて 大徳侯競ひて

彫物螺鈿高荷終りて 皆一雙二雙 彫物螺鈿高荷終りて

を金襴狩絨の こゝに用ひたり を金襴狩絨の

好の者 是は 好の者

扱ひて傷肩を あは 扱ひて傷肩を

河内銅を 屋は 河内銅を

角力番付の 如く 角力番付の

て出付東西の 礎 礎を

考ふ此費 許多 考ふ此費

事 あは 事

ひを 買 買

あひ あ あ

い の の

なつと似入はこれに依りて 宗治 西土より 其多を賞せし 闘鶴と云ふ
を我りしむ 五雜俎云 江北有闘鶴 鶉其鳥小而馴出入懐 神視闘 雉又似
近雅云 鶉雖小而馴然 最勇健 善闘 食粟者不遇再闘 食稼者尤耿々 一闘
而决 故詩言 鶉之奔々 言其健也 ^目 花鏡云 凡鳥性畏人 惟鶉性喜近人
諸禽闘 則尾竦 獨鶉竦其尾 而舒其翼 又多畜之 使闘 有雜之雄 頗足戲
玩 其布袋 納其身 迫之 近つけ 放ちて 養ふ 以て 此哉 其と云て
いまでも せまき事なり 唯放し 飼まざる 此の如き 放ちて び
あさるる 古くても 鳥の如き 蒐獲は 集りて 人々の 軒のりも
林を ぬき ぬり 獲る ぬれ 後 尋ぬ 放ち 多 故 採ら 帖人 なる こと

手 鶉の 心は 此の 如き こと 必 ず 此の 如き こと 人 よく 馴て 其の
意を とも ぬれ ぬれ 鶉 たり 和 各 よく ぬれ ぬれ 俗に ぬれ ぬれ こと
思ひ 鶉の 書を 傳ふ 事 本 艸 採名 張九齡 が 故事 あり たり 事
^{開元天寶遺事} 事 二 五 出 八 陶通志 性 甚 馴 善 認 主人之居 舶人 籠以 逐海 有故 則 繫 書 放之 還家
故 又 曰 舶 鶉 何れ 鶉 鳩 鳩 形 小 なり 鶉 にも あり べし こと 此の 如き こと
いふ 大 和 本 草 上 班 鳩 を つら ぐれ なる こと あり 班 鳩 の 数 珠 あり
ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ 呼ぶ こと あり 京師 あり 鳩 なる こと あり こと あり
味を 物 にも 鳴 声 異 なる あり 土 なる こと あり 聲 濁り くる 事 あり こと
ぬれ ぬれ 九 州 あり こと あり なる こと あり なる こと あり 呼ぶ こと あり こと

雁ヲカリト云モ彼カ
鳴声ヲ呼フ漢人ハ
コノ声ヲ喚トイヘリ
衡州廻雁峯ノ説非
ナルヨリ筠廊偶筆ニ
見ヘタリ

のりしり軒^{（？）}と^{（？）}や^{（？）}ゆ^{（？）}ら^{（？）}其碩^{（？）}子息^{（？）}先^{（？）}賢^{（？）}我内^{（？）}の^{（？）}瓶^{（？）}を^{（？）}信^{（？）}て
 嫁入^{（？）}事^{（？）}の^{（？）}や^{（？）}も^{（？）}来^{（？）}て^{（？）}洗^{（？）}濯^{（？）}を^{（？）}も^{（？）}と^{（？）}い^{（？）}ふ^{（？）}糊^{（？）}を^{（？）}り^{（？）}桶^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}
 誅^{（？）}を^{（？）}い^{（？）}ふ^{（？）}人^{（？）}の^{（？）}白^{（？）}鳥^{（？）}金^{（？）}葉^{（？）}集^{（？）}後^{（？）}泉^{（？）}院^{（？）}の^{（？）}寺^{（？）}時^{（？）}近^{（？）}に^{（？）}四^{（？）}より^{（？）}白^{（？）}
 き^{（？）}鳥^{（？）}を^{（？）}養^{（？）}ひ^{（？）}り^{（？）}其^{（？）}を^{（？）}洗^{（？）}濯^{（？）}せ^{（？）}り^{（？）}つ^{（？）}め^{（？）}ん^{（？）}を^{（？）}き^{（？）}勢^{（？）}強^{（？）}き^{（？）}り^{（？）}に^{（？）}れ^{（？）}
 女^{（？）}房^{（？）}の^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}か^{（？）}り^{（？）}に^{（？）}ん^{（？）}を^{（？）}の^{（？）}け^{（？）}に^{（？）}な^{（？）}れ^{（？）}き^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}
 た^{（？）}ん^{（？）}ん^{（？）}ん^{（？）}を^{（？）}も^{（？）}と^{（？）}お^{（？）}り^{（？）}せ^{（？）}り^{（？）}ん^{（？）}を^{（？）}洗^{（？）}つ^{（？）}ま^{（？）}り^{（？）}お^{（？）}り^{（？）}信^{（？）}て^{（？）}
 た^{（？）}ん^{（？）}ん^{（？）}ん^{（？）}あ^{（？）}く^{（？）}い^{（？）}ふ^{（？）}あ^{（？）}り^{（？）}か^{（？）}ら^{（？）}た^{（？）}る^{（？）}あ^{（？）}ん^{（？）}の^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}か^{（？）}ら^{（？）}と^{（？）}准^{（？）}じ^{（？）}の^{（？）}ん^{（？）}
 北^{（？）}窓^{（？）}瑣^{（？）}語^{（？）}の^{（？）}天^{（？）}明^{（？）}年^{（？）}間^{（？）}白^{（？）}き^{（？）}鳥^{（？）}出^{（？）}て^{（？）}系^{（？）}師^{（？）}の^{（？）}人^{（？）}を^{（？）}も^{（？）}と^{（？）}し^{（？）}王^{（？）}族^{（？）}貴^{（？）}人^{（？）}
 の^{（？）}流^{（？）}流^{（？）}を^{（？）}入^{（？）}逐^{（？）}る^{（？）}殿^{（？）}聞^{（？）}は^{（？）}違^{（？）}は^{（？）}林^{（？）}を^{（？）}義^{（？）}の^{（？）}上^{（？）}あ^{（？）}き^{（？）}吉^{（？）}瑞^{（？）}あり^{（？）}也^{（？）}と^{（？）}

公卿^{（？）}を^{（？）}ま^{（？）}各^{（？）}賀^{（？）}表^{（？）}を^{（？）}な^{（？）}る^{（？）}に^{（？）}後^{（？）}ひ^{（？）}も^{（？）}あ^{（？）}ら^{（？）}し^{（？）}の^{（？）}ひ^{（？）}を^{（？）}も^{（？）}伏^{（？）}原^{（？）}故^{（？）}二^{（？）}位^{（？）}卿^{（？）}と^{（？）}時^{（？）}の^{（？）}
 明^{（？）}經^{（？）}傳^{（？）}を^{（？）}め^{（？）}て^{（？）}考^{（？）}文^{（？）}を^{（？）}な^{（？）}り^{（？）}玉^{（？）}者^{（？）}の^{（？）}吉^{（？）}瑞^{（？）}と^{（？）}賢^{（？）}人^{（？）}君^{（？）}子^{（？）}を^{（？）}得^{（？）}る^{（？）}を^{（？）}い^{（？）}ひ^{（？）}
 了^{（？）}異^{（？）}歎^{（？）}奇^{（？）}禽^{（？）}を^{（？）}い^{（？）}ふ^{（？）}あり^{（？）}び^{（？）}と^{（？）}あ^{（？）}ら^{（？）}し^{（？）}の^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}か^{（？）}ら^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}
 の^{（？）}瓢^{（？）}を^{（？）}洗^{（？）}つ^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}夫^{（？）}木^{（？）}集^{（？）}寂^{（？）}蓮^{（？）}歌^{（？）}の^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}か^{（？）}ら^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}し^{（？）}の^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}か^{（？）}ら^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}
 の^{（？）}瓢^{（？）}を^{（？）}洗^{（？）}つ^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}夫^{（？）}木^{（？）}集^{（？）}寂^{（？）}蓮^{（？）}歌^{（？）}の^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}か^{（？）}ら^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}し^{（？）}の^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}か^{（？）}ら^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}
 昔^{（？）}於^{（？）}此^{（？）}山^{（？）}も^{（？）}や^{（？）}あ^{（？）}り^{（？）}依^{（？）}我^{（？）}中^{（？）}山^{（？）}集^{（？）}の^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}か^{（？）}ら^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}し^{（？）}の^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}か^{（？）}ら^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}
 四^{（？）}千^{（？）}雀^{（？）}居^{（？）}る^{（？）}の^{（？）}種^{（？）}も^{（？）}く^{（？）}む^{（？）}か^{（？）}ら^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}し^{（？）}の^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}か^{（？）}ら^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}し^{（？）}の^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}か^{（？）}ら^{（？）}と^{（？）}り^{（？）}
 日^{（？）}を^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}小^{（？）}き^{（？）}夕^{（？）}鳥^{（？）}の^{（？）}中^{（？）}に^{（？）}入^{（？）}續^{（？）}山^{（？）}井^{（？）}山^{（？）}雀^{（？）}は^{（？）}落^{（？）}て^{（？）}水^{（？）}汲^{（？）}岩^{（？）}を^{（？）}ま^{（？）}り^{（？）}こ^{（？）}ら^{（？）}い^{（？）}る^{（？）}
 此^{（？）}水^{（？）}汲^{（？）}は^{（？）}度^{（？）}り
 打^{（？）}て^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}こ^{（？）}ら^{（？）}い^{（？）}る^{（？）}水^{（？）}汲^{（？）}を^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}こ^{（？）}ら^{（？）}い^{（？）}る^{（？）}水^{（？）}汲^{（？）}を^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}こ^{（？）}ら^{（？）}い^{（？）}る^{（？）}
 此^{（？）}水^{（？）}汲^{（？）}は^{（？）}度^{（？）}り
 打^{（？）}て^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}こ^{（？）}ら^{（？）}い^{（？）}る^{（？）}水^{（？）}汲^{（？）}を^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}こ^{（？）}ら^{（？）}い^{（？）}る^{（？）}水^{（？）}汲^{（？）}を^{（？）}ゆ^{（？）}り^{（？）}こ^{（？）}ら^{（？）}い^{（？）}る^{（？）}
 此^{（？）}水^{（？）}汲^{（？）}は^{（？）}度^{（？）}り

鴨の草莖類聚名物考 呂覽 五仲夏紀鴨始鳴及舌無声注鴨伯勞

也是月陰作於下陽發於上伯勞夏至後應陰而殺蛇磔之於棘而鳴

於上今魚みよこの後より蛙を草の莖に刺とをいふこれハ

蛇を棘をいふ有りていひつけしもの本の通きたる鴨乃

草潜といふみよ久利を約き幾とあるが久を清我を濁て

いふるを浮て異ははき上を濁く下を清く其の意を心得

お供方葉集も鶯の木の間にまゝたるといふ全く此意と同

潜る事といふ意ととり淮南子高誘註伯勞應陰而殺蛇乃磔

之樹上而始鳴伯勞物蛙を木の枝を木枝をいふは

おのまはるをいふをいふは蛇をいふをいふは

己の食をいふをいふは蛇をいふをいふは

おのまはる神中抄も奥義抄を引ていふ説を附合し八雲抄抄

いふるをいふをいふは蛇をいふをいふは

いふるをいふをいふは蛇をいふをいふは

なり又草潜の後いふあるべき五元集元福丙子のうむ月事つ

たると浅草がうし山寺まほびゆり畠中の木のうらめふかふあり

捕のうらめふははる鴨の草莖ありてと抄よりけり草莖包むる

根のうらめふははる鴨の草莖ありてと抄よりけり草莖包むる

鴨カモ也ト日次記事云山林間ト鴨カモ逢ト目居於架頭傍設黏竿而執鴨

鳥ト是謂鴨落トの法ト和漢三才圖會云世俗令蒙頭巾於鴨鴨

或以氏年皮作ト而執諸鳥ト黄テ独テの皮を鴨鴨トは似ト也ト

あり菟玖波集ト霰トのまじり木の森トのまじり木のまじり

まじり人守武千句トのまじりまじりまじりまじりまじり

山トのまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

小多吾吟我集トのまじりまじりまじりまじりまじり

温故集ト雀トのまじりまじりまじりまじりまじり
蓮谷

四トの事ト古トの事ト方葉集十三ト上ト末ト枝ト尔ト毛ト知ト懸ト仲ト枝ト尔ト伊ト加ト流ト

鳥ト捕ト法トヤトマトカトキト子ト

散ト木ト集トヤトマトカトキト子ト

アトミトハトシトトト云トフトテトシトテト

鳥トチトリト侍トリトケトムトサト人トモ

見トヌトホトニトカトリトタトリトケトムト

ヤトモトナトチトリトテト其ト後トカトラ

サトリトケトレトバト云トオトモトフトラトン

シトリトクトリトタルト鳥トチトラトフトバ

フトニトシトジトテトモトカトルトメトミトシトト

...

...

我懸下枝尔柴乎懸ト母トをト...

志トのト...

でト...

以講肄之餘暇而習媒翳之事ト遂樂而賦之媒者少養雉子長而狎

人能招引野雉翳者所以隱射也トの媒鳥トをト...

...

...

...

...

...

...

北窓瑣談 我友ノ父ノ
 方外ノ友ト唐禪師行
 脚ノ時出羽國ニ同宗寺
 ニシテ滞留アリ庭ノ推
 ノ木七ナルカ朽テ半折リ
 リタルヲ 住持ノ掘トニセ
 ケルニハ口ノ中ヨリ雌雄ノ
 巢ニ羽飛去リズ具跡ヲ
 開キミルニハ形ヲ土ニテ
 作リタルガニアリソノ中
 一ツハ早クモモスコシ生テ
 蒲豆共ニハナリ生テハ
 ヤウニ見エ三ツナカテ大サ
 親トリホドナリ住持ア
 ヤミニケル禪師コト聞
 見タルナリシガマノアタリ
 見ルハイト珍ラシクコウノ
 アタメニモカハテ昔ノ
 ナカケ今ハアタリトナ
 ンテ云ケルモナルベシ巢ハ
 ニナエツクク子テ子トスルモノト住持モ禪師ノ博物ヲ感シケリ

雑抄 北窓瑣談 我友ノ父ノ
 方外ノ友ト唐禪師行
 脚ノ時出羽國ニ同宗寺
 ニシテ滞留アリ庭ノ推
 ノ木七ナルカ朽テ半折リ
 リタルヲ 住持ノ掘トニセ
 ケルニハ口ノ中ヨリ雌雄ノ
 巢ニ羽飛去リズ具跡ヲ
 開キミルニハ形ヲ土ニテ
 作リタルガニアリソノ中
 一ツハ早クモモスコシ生テ
 蒲豆共ニハナリ生テハ
 ヤウニ見エ三ツナカテ大サ
 親トリホドナリ住持ア
 ヤミニケル禪師コト聞
 見タルナリシガマノアタリ
 見ルハイト珍ラシクコウノ
 アタメニモカハテ昔ノ
 ナカケ今ハアタリトナ
 ンテ云ケルモナルベシ巢ハ
 ニナエツクク子テ子トスルモノト住持モ禪師ノ博物ヲ感シケリ

神武帝御放ニ宇陀
 高城ニ鴨羅ニキクワナ
 張云ニ神代下卷ニモ
 川雁嬰四圍困厄トアリ
 下總猫サ子ノ獵師等
 鴨ヲ捕ルハムサウ細ヲ用
 江戸ヨリ好事者其ヲ
 雀テ捕スルモアリテ見ニ
 行ナリ
 雪降タ時トトテ洗ニ
 テ落シテシカケ小鳥ヲ取
 ルトアリ是ヲ手洗ワシ
 云ヘリトユ明和二年
 千柳点タラヒワリテ
 用ハヒラレル

銀三友
 泥鰌 三友五分
 玄米三升カホ一年ノ積リテ凡金二十三兩許餌飼
 のこ費めはるる卵ハ二ツ産伏するごと四十五日あつひハ五十日にてと云
 客座新聞見鳥翅更折喂以
 芝蔴仍嚼爛軟患處即監

鷹狩ノ犬 鳩鶏つゝひ 鹿狩 狗山 鈎 六物みじん

北... 御...
御...
御...
御...
御...

推... 地獄細 大穴川

御菜嶋 汐乾 突魚

根釣 川釣 田船 陸釣

日本紀仁德天皇四十三年九月庚子朔依網也倉阿弭古捕異鳥獻於天皇

由臣每張網捕鳥未曾得是鳥之類故奇而獻之天皇召酒君示鳥曰是

何鳥矣酒君對言此鳥類多在百濟得馴而能從人亦捷飛之掠諸鳥百

濟俗号此鳥曰俱知是今時鷹鳥也乃授酒君令養馴未幾而得馴酒君則以韋

縲著其足以小鈴著其尾居腕上獻于天皇是日幸百舌野而遊獵時

唯雉多起乃放鷹鳥令捕獲數十雉是月南定鷹甘部酒君百濟王の孫ふり同五十

年春三月壬辰朔丙申河内人奏言於茂田堤鷹鳥產之即日遣使令視曰實

也天白手於是歌以問武内宿祢曰云何者豆ツシ莽マ椰ヤ莽マ等ト能ノ區ク珥ニカ

利古武等本聽難波企サカ箇輪椰サカ河内始ハジメ茂田堤ハジメ子產コノタマヒ

天皇御制卷カリと河内鷹鳥雁字を記し茂田野物語よ

仁德天皇の時高麗より紀熊の記記を養鷹

記榮屋長朝倉敷景が鷹鳥二雛を育ヒコ中仁徳

の時百濟國より鷹と大と記献すその船載別敷かまろ鷹

養ふ者を米光といひ大を養ふ者を神光といひ政頼奉勅赴敦

賀迎使などいひ茂田記より仁徳の事ハ嵯峨野物語の誤をいひ

形雄より大

養鷹記云細俗訓見鷹方
小訓見鷹為大より

和名抄云不論青白

大鷹を三歳をこ上

源氏夕雲巻にわがまがふかふか

源氏夕雲巻にわがまがふかふか

東雅云此處で鷹乃

我急り見こる今朝鮮

類を味し各韓地の方言多し

の俗鷹をばまとい

西陽雜俎云鷹鶻方等詳あり

新修鷹経を嵯峨天皇弘仁二年

後系極屋三百首を始め定家

用る鷹大よ佳名を付し

木子亨好馳駿狗逐狡獣

健白由青曹之名鷹則有青翅

鷹ヲ招キ寄ルヲキト云キ

拾遺集物名ノ秋ハニカ

後撰雜三ツカ為ニツキ

下ニテ鷹狩セシム

ムカハ諸國ハ勅使ヲ

狩ノ使ト云伊勢物カタリ

後京極殿鷹三首
 スクメ鳥ノ朝野余載
 五米二滄州東光縣空
 觀寺常有鶻鴒集
 重閣每有鶻鴒千鶻冬
 中取一鶻以煖足至曉
 放之而不殺自餘鷹鴒
 鶻不敢侮之也埤雅
 五雜俎トモ見エ
 ○白川侯唐書を
 ぞのうさしぬ民の
 かひきり取りを氏
 りのあらん

鷹ノトルコノ内ノスクメ鳥氷ル根イサケツシル
 鶻鴒飛鶻揚万年有猛犬名青駿買之百金云と云々

鶻鴒を（鶻鴒を）つらふ（鶻鴒を）古事記神武の御旅志麻都登理字加比賀登

母伊麻須氣爾許泥（母伊麻須氣爾許泥）万葉集十七安由波之流奈都能左加利等之麻

都等里鶻養我登母波由久加波乃伎欲言瀨其登尔可賀里左之奈豆左

比能保流（比能保流）和名抄よと云々鶻鴒（鶻鴒）シマツトリ（シマツトリ）のひ小あるを

鶻鴒（鶻鴒）俗（俗）よ（俗）と（俗）は（俗）皇（俗）の（俗）禊（俗）なり鶻鴒（鶻鴒）島（島）に居るハ鶻の

鶻鴒（鶻鴒）を（鶻鴒）の（鶻鴒）に假（鶻鴒）て書（鶻鴒）ふ（鶻鴒）古事記よ志（鶻鴒）の（鶻鴒）り（鶻鴒）され（鶻鴒）と（鶻鴒）云（鶻鴒）東鶻鴒ハ

別物（別物）にて鶻鴒（鶻鴒）は（鶻鴒）似（鶻鴒）る（鶻鴒）鳥（鳥）の白（鳥）く（鳥）て（鳥）鶻（鳥）を（鳥）啣（鳥）ふ（鳥）た（鳥）る（鳥）裏（鳥）の（鳥）如（鳥）き（鳥）の（鳥）

鶻鴒を胡（鶻鴒）とい（鶻鴒）ふ（鶻鴒）の（鶻鴒）内（鶻鴒）に水（鶻鴒）を（鶻鴒）の（鶻鴒）入（鶻鴒）て小池を（鶻鴒）之（鶻鴒）月（鶻鴒）し（鶻鴒）魚を取食ふ

あり漢土（漢土）めで涸沢（涸沢）あり洵河（洵河）なり呼（呼）とい（呼）ふ（呼）古事記寛徳二年二月頃

来住侍從池伴鳥鳴詞有飯無菜（来住侍從池伴鳥鳴詞有飯無菜）云々（来住侍從池伴鳥鳴詞有飯無菜）四神地名通関村の條に沢の内にて夜中

毒魚者也（毒魚者也）あり（毒魚者也）を（毒魚者也）つ（毒魚者也）き（毒魚者也）碓（碓）き（碓）或（碓）ハ（碓）遊（碓）て（碓）水（碓）に流（碓）て（碓）魚（魚）を捕（魚）ふ（魚）を（魚）い（魚）ふ（魚）氏（魚）あり（魚）ハ

陽（陽）に（陽）何（陽）も（陽）魚（魚）に（魚）中（魚）に（魚）草（草）木（草）タ（草）ハ（草）草（草）あり（草）用（草）ふ（草）夫木集知家の終み山川の魚を

小鮎（小鮎）の（小鮎）幸（小鮎）ふ（小鮎）古事記傳（古事記傳）よ古（古）鶻（古）を使（古）て魚（魚）を捕（魚）ふ（魚）とい（魚）ふ（魚）多

かり（かり）故（故）に（故）供（故）奉（故）鶻（故）養（故）有（故）て職（故）負（故）令（故）大膳職の下（故）に雜供戸と

云（云）ハ（云）あり（云）を（云）義解（義解）謂（謂）鶻飼江人網引等之類（謂鶻飼江人網引等之類）とあり万葉集を始り

て世（世）の（世）鶻（世）河（世）を（世）よ（世）め（世）る（世）多（世）く（世）物（世）終（世）書（世）ふ（世）此（世）後（世）ア（世）ン（世）て

中昔（中昔）あり（中昔）何（中昔）処（中昔）川邊（中昔）なり（中昔）鶻養あり（中昔）て今世（中昔）も稀（中昔）ハ（中昔）遺れ

子とてり杜甫詩の家々養鳥鬼頓々食黃魚事物異名計鷓鴣の下

又鳥鬼蜀人の似鴨而小色黒時珍鷓鴣をいひて似鴨而小色黒沈括補筆談云

近世註杜甫詩引夔州圖經稱峽中謂鷓鴣為鳥鬼蜀人臨水居

者皆鷓鴣繩繫其頸使之捕魚得魚則倒提出之至今如此

多く集りて田間は牲酒を設て戦死の人の祭をまじ

これを養鬼といふ是養鳥鬼といふ也非あま濃め岐阜長良乃

は至巧といふ也他國の漢人乃がとりて長良の瀨の邊に

瀨の邊まで三里の間を上川といひそれより下川といふ舟の

船の上より七艘流し舟といふ鷓鴣の一人揖取一人なり船先は

兼を焼後流し舟一人あつた後を繩の流し舟といふ左右

の指の膜はあちてお鮎を十分の香する船は舟をうよよをたの

きよ捕へて鮎を吐きぬみ移を水中へて鷓鴣繩長と一丈二尺移の首を

環を掛る月移舟といふ凡三四月より初め八月晦日限り

鮎をいひたり百莖根大垣の藩士伊藤実臣持てたもの長良川を

魚庄俣川の渡の河上は岐阜北北あり長良川の鮎江戸献上あり

長良より三里川上を小瀨沖といふ所の鮎尚方より頭少く背

丸形あり小瀨丸と稱し其方概よおあめ七八寸重百錢五極大あり

長七尺一寸重百八九十目池田郡糟川又本巢郡根尾川伊津貫川乃

鮎はちめり魚より方縣郡鷓鴣村は岐阜の北なり元来鷓鴣舟十二

亭^{あそび}を納涼の^{あそび}め^め移^く流^るを^上より^下へ物を^とり^とと
那^な系^{けい}を^は流^るの^{あそび}列^をば^様子^巨を^いたり^とり^と此^の魚^を
初^はき^る魚^の他^りの^魚も^なら^ず深^い氏^の常^夏の^魚も^なら^ず深^い氏^の魚^も
保^ある^な祭^儀の^老大^の魚^は流^る魚^の他^りの^魚も^なら^ず深^い氏^の魚^も
細^おろ^し物^をし^て鯉^ふふ^とも^なら^ず深^い氏^の魚^も
い^ふあり^と今^は用^ひひ^され^ども^なら^ず深^い氏^の魚^も
他^りの^魚も^なら^ず元^文より^流る^魚の^他り^の魚^も
初^はり^の用^ひひ^され^ども^なら^ず深^い氏^の魚^も
今^取士^試之^小道^而不^以遠^大是^猶以^蝸蚪^之餌^無海^而望^中吞^舟之^奥不^亦難^乎

同書^州五^{五行}志^貞元^十年^四月^江西^溪洞^魚頭^皆戴^蝸蚪^とあ^る魚^の口^に含^むて^端の^出る^ある^と

又^魚を^釣る^餌は^竹の^皮を^之し[○]蚯蚓^を魚^の

と^呼ぶ^の潮^の入^る川^の土^中に^ある^虫沙^の多^き也^はあ^る肥^どる

淨^名禾^虫之^事物^紺珠^虫之^食品^類は^禾虫^秋成^時随^海潮^浮田^上
如^蚕味^甘とい^ふ彼^虫は^魚の^餌と^する^事を

い^ふ嶺^南雜^記禾^虫形^如百^脚又^如馬^蝗身^軟如^蟬細^如箸^長二^寸

餘^青黄^色相^間中^有白^漿狀^甚可^惡産^海濱^田中^禾根^長數^尺或^至丈

許^縷々^如血^絲随^海水^而出^漾至^海濱^寸々^自断^為此^虫土^人網^而取^之午

前^擔負^而賣^{午後}即^敗不^可食^取虫^置器^中滴^盐醋^一小^盃其^將水^自

吐^瀉以^蒸雞^子最^鮮藩^逆時^禾虫^亦稅^至數^千金^の誤^ある^とし^下文^は如^血絲

揚^る青^黄色^ハ赤^黄
の^誤あ^ると^し下^文は^如血^絲

とあるは又長き物の断て二寸餘の虫とありて誤りて浮く
出ると多く集りて水面を渡る長きものより浮くや
廣東新語

も節断して浮出たり誤りし又云得醋則白漿自出以白米泔濾過蒸

為膏甘美益人蓋得稻之精華者也其醃為醃醬則貧者之食也

おとあつめりて河岸の潮水満干は草根は居まると米田は

生さるる夏秋の堀で取浴て出さ秋めは毎歳たう

十月の三日の夜新月の光を映して水面は浮く紅ありそれより日

浅紅く又浮出づ於て二度をり出つをぬけをその膏を

伺ひて漢人船は京四の白魚ありて取貯て

冬月の夜の餌は賣る物りよは浮出て三年はあはれしは生さるるは

廣東新語未熟状如蚕長
一二寸無種類夏秋間蚤晚稻將熟禾虫自稻根出潮長浸田因乘潮入

海日浮夜沈浮則水面皆紫米者以巨口狹尾之網繫於杙逆流迎網尾

有囊々重則傾泻於杙之所在江兩岸其名曰阜々有主争者輒訟与

置門白蜆塘皆土豪所私以為利者也其種類多矣

一種は尾の尾の白し

尾は冬月の浮く出るとありて魚を釣る用

中流に居るは又水より浸さるるは冬月
は限はいつまで浮く出るとあり

あつをあげ釣るはあちけ用まは釣といひしを

Handwritten notes in the top margin of the right page, including the name 'Shirayama' and other illegible characters.

ヒ、ナクナリニ此許ナド
ニヨレルナルヘシ
寛文九年巳酉十月
芝新細町宗十郎

これを取らんと欲す ○今品川鮫海の邊より海苔をとるもの
ゆと魚を取らんと欲す事跡合考 初や町の事 二つは鮫と云ふ
もの事 三つは細々と云ふ 正字に 多し漁人 詞は鮫の製海中に枝付の
竹或はまき竹をある處まで 風雨大浪より 破れぬ様よきなり
向を一処あけおく魚ども ねのうらみ 入るれきとも 出さとも なるぬき
うらみ なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき
品川表流川浦等此邊に 牧幾千より 上総三浦本牧等乃
漁獵少く 浦の者愁許年を 経たり 一とを大水より ぬ
糸入浪よきなり 此打はきき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき

久六門支配ノ獵師共
ヒ、細なるも當年
ヨリ三年ノ内無用花
ヒ、竹ノ葉當月中取
拂可申候其上五ノ四
ナヨリコマカナル網堅ク
ツカヒヤラズ
此時芝ノ堤出美其土
ヲ以新細町ノ辺海手ニ
築地京間六間四方坪
敷五千七百九十坪
○サテ野船ノ陣狀ニ非樂
コモ枕ノ奇ニアニオシサテ
サシホルト云ヲリテ集ナ
トル所ノ細サオロシサテト
云物ヲササテサシホルト云
トアリ今漁人コレヲ 玉ト
イハル畧語ナルハ西産
ナトガ言ルモノニハチ玉ノ
スクヒ細トイヘリ同書又云サテサシウケサフセテ瀬ニフス鮫ヲ取定ニフニツケテモフツカフナフスナトリ云、

かゞ断絲をうらみ 今も品川浦及び辺に葉付の生体在水中
ゆりゆりて春の苔をえ 枝初生といふ物 一々甚むる 初めを死
なる獵師ども 居らぬも なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき
出さし なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき
たつた魚をとる具に 近ゆめく なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき
どうと云はたのわいふ なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき
なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき
宇倍うけ なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき
并に橋も なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき
唱不中事 なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき
焼く後 なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき なるぬき

揚万里が 過臨平蓮蕩詩 蓮蕩層々鏡様方 春来嫩玉折新光

神武紀天皇徵省吉野之地云：涿水西行亦有作梁取魚者天皇問之對曰曰是菖道擔之于此則阿木養鴈部始祖也

角頭一々張蘆箔不造魚蝦過別塘

和名抄ニ籐葉とある物ニ似たりともこれ魚を養ふなり

和名抄

籍をヤナズと判り取魚箔也と注あり梁葉の義ありむらびきの畧あり潮水さし又魚取きは竹木の枝動くとのぬきかひと云
糸やふれ和判琴は梁をよあり屋魚の義木をよせ魚を捕る物
あやあや川さしと云り年魚の時冬流の春河のやあ
くさし親つるさしと云あは流の延流式は細代と判り冬川は氷魚を
少人とも百千此杖を細引取あやち其木よたてぬき入てそそそ
よ簀を何と云と云と云り源氏物語十月よありてあやの福と云流
あやが流あやの流をそそあやの流はあらんとあやとあやとあやとあや

細代をばむらぶ郷

後撰雜ニウチノアジロニ知レル人ノ侍リケルハマカリテ大江真俊宇治川ノ浪見ナレシ君マモ

我モアジロヨリヌベキカナ契沖云アジロ宇治ニテ別ニ所ノ名山概記云
永曆元年十一月一日乙亥博陸内相府相共今高宇治細代給ニトアル地名マモ云リ孔雀樓筆記ニサ
梁といひ傳はる魚を養ひけりいけを北地めて梁と云ハ魚を捕る
具めて徭いけと云ハ取金くらまり具を他多し多く巨杖を用その費
用甚多し夏秋これを大河に投げ雨の都合なれば只一日は鮎を得る
る馬救十駄よあるの都合よと云ハ梁を破るればは具を掛る者
たよ財を損を鮎のわよさけ杯取梁のより木とり少よをわれば
いよ鮎魚もも望之流さしし梁へあや死する人少しと云多し先
年馬流さ流を死と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云

古今集恋部一しせれあのあまのほりありおろしき
 本居氏遠鏡よ千秋云
 アマツリハハ打ハテクル
 トツケタルハ系ノ長キ繩
 ニ釣ノ枝系アマタケテ
 海中一遠クウチハオキ
 テソノ繩サクリヨセアゲ
 テカノ釣クヒタル魚尾ヲ
 トルワザアリヨシ今世ニ
 コレナク釣ト云ハ長繩
 ノ釣トイヘレテ訛レルナリ
 国ヨリテ長ハトモイテ
 此方打ハテクルト云ルヨ
 常ノ釣ニテハカナヌフ
 ト云ヘリコレヲシレハ尾張
 ニテサオハフト訛レリ
 古史記出雲ニ天之所舍
 ナシニノ処拷繩ノ千尋
 繩ヲ延為釣海人尺之
 尾翼射云コレ長ナハ
 古史記拷繩之千尋繩
 打延為釣トアル即コノ釣
 ヲナヘテ云ル

鯉魚を釣りハ後ノ梁へ落し水勢を強くしり木をさしれどと捺
 へりて落しけりハ化龍の注有きまき氷にどきぬぞ注有きまきの氷を
 水中めて是を捕る人ありは志す思哉同じ又五月は林南の時
 河より稲田よのりま村民の打打方エモ怪あまの人のよ
 河に釣し又そののりまの麻索十数其の
 枝をつけその枝ははり釣り諸雜魚を餌とし本索の両端
 又望をつけ海よりまきまき獲るものりまの舟のりまこれ
 鳥方とある事ありとあり是播州漢人の詞をその伝ふありや
 りまをまきまきハ繩を延るなり是長索めてハたしハ索をまきまき
 又柴漬ハ私名抄ハ採木ハ漆樫ハ新撰字鏡コフシツケ

○江戸ニテアミト云ハ
 タウ細シ雅遊醉真集
 西湖八景漢村夕照
 唐アミノ目テカシトハサヤ
 ヌモ夕日ニルキ蠶ノ家数
 カアミノ裾ニハテテ教多
 シ釣ニテ作リ名重リ付シ
 コレモト石ツツケニヤ依テ
 イハト云ナルベシ夫木集
 隆実ハ人ニシヌ身ノ
 思ハハウシマトニ引カスアミノ
 イハテ過スル此イハテ事件
 ノハハツ云ニヤ
 ○縹ヲタト呼顯昭説ニ
 タモハ魚ヲタムハトイヘリ
 後報ホカリハハカケ
 ミハハスラチハタモイト
 ナハ鯉ニクムミハハハ奇云
 攪網サ云ハハハ也
 依テスクヒタマトモイハハ
 思フモタハハ有ハカス

魚を捕俗をいれを切込といふ
 下総鉾子浦ハ漢場ハ其古ハ出ル地ありといふハ彼方ハ古ハ海鯉を
 漢場ハ其厨膳の鮮物ハ天津浦の饒ありハ志あり
 地獄網ハ其今ハ北條五代記ハ今相模

多ク物ニアラナリ

冬形自キ故キ心得呼

ハ玉抄子ノ事同シヲモリ

將ニ地名トハミテガレシ

○イドリノ事トモサシト

夏ハ次ニシリヲ流ト河

ニタササテヤ云ニコラハ

方ナルササテヤヲ玉ト

云ナリ

一

一

一

一

一

一

一

一

一

安房上総下総武蔵此五ヶ國乃中ノ大入海あり 諸國の海を廻る

大魚トモ此入海をよぬ住如トモ集まるとも 関東の海士ニテ

海士トモ此入海をよぬ住如トモ集まるとも 関東の海士ニテ

國の海士悉く関東一帯ノ此魚をよぬ 地獄網トモ大網を伸り細乃

ち焙は二人志ヲ持てて石をニツクテ付量を千貫石トモ若く二筋網を

つけるときニテるると二三寸のものをとて 各付大網の如き千と二千

と付て其様トモ本魚の目よむとて 舟一艘ノ水手六人ト七艘

トモ京方海人出テ網をかける方ニ艘ヲ引取れて大網を引一艘ト

トモ舟トモ各付細網トモ舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ

大魚小魚一ツもあつても事取れず 舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ

舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ 舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ

舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ 舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ

舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ 舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ

舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ 舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ

舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ 舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ

舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ 舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ

舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ 舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ

舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ 舟トモ各付の網トモ引取れて此網のゆえ

天正十八年

其近辺塩桶用也
 七止コトヲ海女ヲ馬
 ニ負セ近在三島田畑ノ
 肥シトナス七八寸ノ奥ハ
 價十錢持此冬江戸
 ニテハ章魚甚多一時
 人云多ケレハ味ナドテ求
 ル者少シト云ヘリ章魚ハ
 其後文政ノ初ニ多キ
 アリキ人々テ其頃冬
 春ニ何處カ必スウキ時
 アリ鳥賊カサゴヒラメ
 芝エビナド殊ニ多キ
 アリキ芝エビノ多カリシ
 時ハ猫コトチリテアマ
 斃ルリ文化七年ノ冬
 マロトタリ惣豆相三州
 ニテ一日ニ萬余ヲ獲アリ
 トゾ

塩尻ニカレハ左ノ方ニ
 目アルヒテノ類ハス
 カレイト石ナキ者皆
 左目ナリ石カレノモ
 ノ方ニ目アリト云リ又
 車エビノ小ナル者サイマ
 キト云屠龍工隨筆
 ニサヤ米ノ鞘ニ似タレバ
 此蝦ヲサヤ米ト云シ
 トアリサヤ米モエビサヤ
 米ト云ハ尻曲リテエビ
 如シ
 ○又イナハ浮アルク魚故
 簀ヒキト云フヲ捕テ
 細キ竹ヲ簀ニ編テ敷テ
 モ多ク丹ニツテ澳スル
 場ニ至リ水上ニ浮メテ
 魚ヲ追ヘバイナ黄ノ上
 ハ子上ルヲ取ル此魚ハ
 夏ノ初メオホコトスレ
 ヲ洲ハシリイナト成秋

○万葉集ニ塩干乃三津之海女乃久具都持玉藻將刈率行見同集九
 雜波方塩干余出而玉藻刈海未通女等汝名告左祿和長記延德四年
 三月二日壬午晴今朝藤中入道室家依誘引詣往吉社為見物塩干也云々
 日次紀事云三月三日海潮大乾泉州堺浦特甚故諸人競來拾蛤蜊執
 小魚洛人亦赴當日住吉汐手祭也滑誓雜談云住吉浦汐干凡三月三日
 より七日おとも汐干見物の名泥中の蛤をゆきを方言よけり
 りとめて踏或ハ持のせめて突て蛤蜊のあまをを知らしむる
 蛤陽集前の魚あふまき中汐干も類柑子親もあめを
 踏むるはひし晋子あ鹿子三月三日芝浦汐干名所鑑菱川後本
 類柑子親もあめを

屋おひ三日いさや塩干見物人々多しなり相合さるる見物也
 芝のう繩多し海を越れば人あふ集り居て汐の干かゝる蛤
 あぢえを拾ふさかしの家もうほひやもあはれはうほひ
 ちやうとさや汐のさあやを汐干しつゝあはれをせきもあはれ
 ちやうと汐干さむやせんのかうみ江たみか今月はあはれ
 あはれ魚をよおし出りの常より魚を突く山家集子字法例
 をさうりる舟のあはれさかしの物かゝる鯉のさうりをほきんを
 多海河のさあはれあはれさかしの物かゝる鯉のさうりをほきんを
 むるさうり和名抄漁釣具并纂要云籠比之漢語抄云以鐵施棹頭因以取魚

其後テホラト名ク江戸地
 在ニテ秋ニ至リ其中ニ
 大ナルヲ十ヨシト云サレド
 名ヨシ他國ニテハシクク
 名ト聞ニシテハ江戸ニテ
 初メコト呼ソレヨリ
 「カフ」ト云ハ十節ト云細
 目ニソレニテ或モ故々名
 ナリ大ニリタルヲ「メナ」
 ト云コトハホラヨリモ大ナル
 モ「シ」形ハ似タレモ首扁
 タリ

○諺ニ少女ヲオホコト云
 七葉、名ニヨレルニヤ又
 二度オホコト云ハ若
 カレタル心又カレリ新
 矢ト云フニモ通ヒテニ
 前句付口寄神ウラシ
 ン
 一ハニ度オホコス
 日ハシリ履ハナシカ
 難波入ノ作シ

○ホウノト云魚名ハ
 コレヲ取テイケ舟ニ放チ
 置ニホウノト鳴音スル
 者ナリトツ
 次テニルス津村正茶カ
 阿古ヤノ船ト云紀行秋田
 ノイチ云フニ十月十日
 アラレマニリニ神サナルヲ
 珍ラシトケハコレハ此國
 ナラヒ冬ハイアモシカ侍リ
 公ク神鳴ニヤト云イカナ
 ルソト云ニハタノト云魚
 海ヨリノホラニトスル内イツ
 モカク神ナル此奥守ノミ
 オヤ昔ヒタチ國ニイマモ
 シホトハ彼國ニタカリシカ
 コニカツロビ玉トシ後ハカ
 ニコトエテコニ出ルトト
 ナリスサレハコノ人メテダキ
 タクニシテ冬コニ酒カス
 或ハ塩ニモツケテ大ナルニ
 貯ヘ年ノ初ノ祝ヒ物ニハ

也ト何ヲ比之といふ也カガナ
 状菱ニ似タリトシ鯨
 山遊集ノ「あつまといふも
 二股の意ありやまを蝦夷
 島ノ續山井洞ノ隙ニ鯨を
 乃用ひしもの形也今ノ如ク
 魚頭魚首ノミミト云々
 何リその杖の巾比先ハ珠
 二股より他ノ形也大ニテ
 三股より他ノ形也大ニテ

少で共ノ用ハ大魚ニシテ一
 突々として又珠の如き
 足もを魚を踏ケルこと何
 を流し突といふ地ノ伏
 見突を魚の首を引付て突
 より水底の魚を多くとめ
 あらぬ業ニ其を常ニ空
 聞は四方より四股より中
 くらもつとつり水の清

家コトニ必スモテハヤシ待ル
 三ノ十二日具ハ神ナリニ合セテ
 ハタクコトニタラシク市ケラノ内
 イツコモク処セウハコビテ
 アキモノス
 ○又云ハセノ魚浮ヨリ取キ
 タルハ江戸ノキスノ魚ヨリ
 モコヨクニサレリト有コハ
 白魚ノ價卑キトツイヘル
 次ニカクアハキス價ニマサ
 ルルナリト

そしは... 沖を水の中より滴して...
 四五月より赤魚の類内海より水中より魚...
 魚を彼が針... 足なき... 又大魚を突...
 魚大あ... 採返...
 此突魚と鰻鱺の穴釣... 繭と...
 又三四月の... 蠶を突... 糸串の...

○キス釣... 船頭五カ仁... 云者... 由安永三年... 水...

針... 潮干の... 突...
 五月... 春... 東中川...
 九月... 類... 本日...
 昔... 俳... 度... 曲... 年... 刻... 流... 文... 里... 揺... 揺...

ウナギノ水中ニシテモ千ニ
ツカム一昔ハ至テ希ナル
ワナトハ至リ宝厩ニセ物
尺ニ画本ニ兼ニヤガニノ
水中ニテウナギヲ取テ
ニスル処アリ近年ハ皆人
コトヲヨクカサレトマテモ
後ホトノ巧者多クナリト云
○ナニカハシキモノナリト云
ナリト云

石アルハ、重荷ノ舟ノ沈
没セル処ニトモモ必シモ
其時ヨリノ一ニ限ラニ次
オニ埋ルモノナリ其後
又モカ、ルノ有シ処ヲ根
ト云
寛永十八年八月朔日
救十ノ石舟田川沖ニ沈ム
処ニトモモ是ナリ
一説ニ、長十一年五月
五日伊豆国根府川ヨリ
大石ヲツムテ迎シクルカ、
舟ノ沈メル処ニトモモ
モノニハ限ラヌナリ
サレト早クヨリ根釣ト
云フハアリナリ

おとす根釣之類 舟乗遠き 生きあみりや汗に鱈 寛永十八年九月より後、
濟水寒 舟乗遠き 蝦虎魚ふれ 舟乗遠き 海物妙集 舟乗遠き 魚を釣ふ
紫河 舟乗遠き 風波の難 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き
と 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き
食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き
舟 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き
ふ 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き
舟 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き
○ 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き 魚食 舟乗遠き

石アルハ、重荷ノ舟ノ沈
没セル処ニトモモ必シモ
其時ヨリノ一ニ限ラニ次
オニ埋ルモノナリ其後
又モカ、ルノ有シ処ヲ根
ト云
寛永十八年八月朔日
救十ノ石舟田川沖ニ沈ム
処ニトモモ是ナリ
一説ニ、長十一年五月
五日伊豆国根府川ヨリ
大石ヲツムテ迎シクルカ、
舟ノ沈メル処ニトモモ
モノニハ限ラヌナリ
サレト早クヨリ根釣ト
云フハアリナリ

といふ者常々トコの小船めて網を打算ウチをば魚を二取を業ノミとしむる
其小船を釣人の借を此者漁りしむる市川の宿は市立日何の
市は江戸法ありりとのよ衣類の古白を商ふ借をたしむる若
魚釣しおぬるるが市川の宿は泊り市の初と此河路は終なる船を借
て試すよ釣を垂しと思の船は魚を海へ捨てるその市はなほし釣
ふは舟を物と運ぶよし金も釣を止るこの舟道ありぬ此より
お賃をきし船くさん者やあると聞れざるぬるあり世はだに彼と
舟を釣ふ借をとりやうんと我おが家をさぬおぐあり
縁をいしおむる船を借へるぬるぬるさつれは魚をく釣を
りて物通途めて人々問答の世傳してそれより釣人多く来りぬ
かくてぬれ何をよ小船を多家多く出あさり釣宿といふその妙
権やを始しむる今徒あるを父ありとの始天の末より寛政の初より
乃このは魚の釣の志けあふし沈重く計はたさるる今もこれ
あはれぬるるぬるる大魚多く釣をりといふ人々巧者多る色ども
釣人多くかりてえむるは海釣のわつとあし
室水の東面や殺生禁制の法は歩釣の祖は爰久保錬ちあといふ若旧徳の何ご
おはれをく釣を好むるよまも聞えて推測するり出る時錬ちま旧徳よいあさるこ
めさいのそをむるといふは釣せむる中関ふはしはあまにわより物
さる由中へといひや出さるはいづかぬと聞かれし時錬ち中へは禁制より
あつる若年よりはさるる事ゆへに止るをせむる同ハもあつるあもさるる
中物村あはれいづかぬめしと聞されぬる若年より此のよ誦りし人の

寛文八年乙未の初めより、自ら能く世に名を傳ふるに、
是より一人きりて、未だ、初め、
此の証、
或ハ、
まて、
りり、
こそ、

漁獵苗の札、享保二年丙二月廿五日、濱、
内、向、後、漢、獵、苗、日、四、月、廿、三、日、淺、草、川、筋、牛、
豊、山、村、多、札、場、と、漁、獵、苗、
あり、
て、ハ、八、月、以、
初、あり、

寒中材木の河中、
の、
よ、
と、
釣、
怪、
何、
これ、
さ、
ま、
き、

あり其海のうらや長き蟹れふまの又未長くなほその思ひ
 結ぶ人の契りのぞとね 又和歌 古歌もつゝあはれおの思ひ
 めをの物ぞたの 鮒を初に浮を去りしを釣好み昔もあつし
 又竿は昔はまろり竿あまを 釣好みおの思ひ成享和文化の
 本和書に述ぶ武を海を云ひ 若草もよも他はこれに学びて利を
 と云とのみよく釣り出し 継竿は風一変りたり 藤のつら
 竿は本よりとあひてあまを細きととと釣好むを云若草
 度侍寺のつらを云ひ 利をつれの竿を云ふやいさう今も
 釣具師東作偶釣魚不獲戯賦示之 汝家六物称精良 術学
 亦香獨奈魚見潜不食 凡寒水冷 到斜陽 今もまろり
 竿あまを名

淮南子 鱖釣於河濱
 期年而漁者 爭感滿
 瀬以曲隈深潭相予
 曲隈 魚集於此ナルヲ
 鱖 德ニ化シテ漁者其
 処ヲ爭ハサリトシ隈ハ
 イニルマクリナルヘシ

つゝぬ老多しとわたりと水の湾頭より河邊よわたりと
 往あり元續竿ハ入る幾つあも二本おのり業は彼藤利を
 およより細く物神を化すニわたりわたり始て三本おのり
 事とわたり 友人福島柳顛子寒江釣雪詩 和歌を二
 次韻して返すこれのあつし又返す事五序より
 此詩教贈をよも此は福の笑ふを贈詩教ぬを△下を付
 それを拙作と知す △寒江釣雪 要試寒江雪裡奇一場花上
 坐多時 風荒水動魚難得 怪殺先人有此詩 釣の心哉
 雪めも清く人づから釣好む人づから釣好む 初度涼韻 文人底

事癖尤奇以味羽風飄雪時何管垂綸魚不餌朗吟釣得好新詩

おふ心を風をまき入ゆのみまきは白妙のまよ釣くふわあもまを△再度

造功何物不新奇又值寒江釣雪時幽趣此中人若問妙存賢弊次韵詩

秋とまきまをまき入ゆのみまきは白妙のまよ釣くふわあもまを△再度

景入新題物自奇寒江霏雪垂釣時間遊相伴聊知趣已調不顧對清詩

物名 美秋といはれりくしし年したるをりちりれをりりまき △三度

雪裏风光一奇衝寒不厭至昏時苦心此處人無怪竊學子凌欲入詩

物名 雪の江にまきまをまき入ゆのみまきは白妙のまよ釣くふわあもまを△再度

寒江釣雪賞清奇乘興高吟是一時漫將瓊瑤投瓦礫枉為知音許多詩

物名 釣さしれいりる者河をまきまをまき入ゆのみまきは白妙のまよ釣くふわあもまを△再度

河原のほらむむまがれをなまきまをまき入ゆのみまきは白妙のまよ釣くふわあもまを△再度

釣鯿於君術最奇正知其妙冠當時雪簑此日人難耐久把漁竿口詠詩

物名 ころみんまきまをまき入ゆのみまきは白妙のまよ釣くふわあもまを△再度

かきれせも吹風まきまをまき入ゆのみまきは白妙のまよ釣くふわあもまを△再度

同休知君亦好奇慶仲妙術冠于時清新多吟詠身在漁磯意在詩

折句 河面を狭まなれりまきまをまき入ゆのみまきは白妙のまよ釣くふわあもまを△再度

乃布るういりまきまをまき入ゆのみまきは白妙のまよ釣くふわあもまを△再度

香餌一番奇頭々引鯿滿籃時魚心若解人間事愿羞題被入拙詩

物名 △才五細綸

人あかき名こくあめりし此河より釣をとるぬりいあし其法をそ
いざし哉つむ今りまきこふごの雪ま神をまのしし
せうしきけものやけきいたふはをれあひしりり五次三冬小釣一
孫奇方是鯉魚肥美時調烹得宜未深指誰知厚味在君詩 物名
ふれとまき名こく釣あき餌をまぬ魚ははくまをれあひの
五元集是釣のしし汝安や秋の香艶乃通檻笈ふまを川釣をり
り釣路は飽て西此じきまの僻とのしきせは波の難あく安
素あつら陸釣あり鯉釣を東西首西その場如多し二月より
八月とし〇まの地釣といふと池中魚を放ちてて傳を定

りて釣しむ釣中らぬ鯉魚は鱈魚の尾鱧の釣金
はるを急よりとるを引けと云釣あは此地本不海川也
よありそをぬるもの又多帝京景物畧西堤條万曆十六
年上謁陵還幸湖御龍舟先期水衡于下流漸水々平堤内潜鯉巨
魚水中一処々識近則奏奉網紫鱗銀刀澹刺水面上顔喜いぐめ
うやれ推ふき事あり 金魚ハ本草綱目曰前古字知惟博
物志云出功婆塞江腦中有金蓋亦訛傳述異記載晋桓冲遊庾山見
湖中有赤鱗魚即此也自宋始有畜者今則處々人家養玩矣
きぬ事大倭本草昔日本にゆれなり元和年中異域より來る

人ふ賜りしより世も多しなり漢土の金魚屋六件の景物畧に金魚

池金代の魚藻池の旧跡あり池泓然也居人畏而塘之柳垂覆之歳種金魚以為業云

歳穀雨後魚則市大者帰池也若沼小者帰盆若盎若琉璃瓶同書春場

條琉璃瓶盛朱魚樽側其影小大俄忽とあり可得且又游活耳歳盛夏游人携魚茶飲此投餅餌

啜呷有声其大者御餌竟去按金魚古未聞前輩曰惟杭六和寺池有之

故杜工部詩沿橋待金鯽竟日為遲留菰子瞻曰我識南屏金鯽魚

今亦貴鯽不售鯽むいとろの壺に金魚をいりて事いこはは効くも

すく金鯽に菓子あど投ふて真なることわくし月しにたぬあ

かき金魚屋あきもくぬりしあるしに江戸唐土も下谷池の端

とんちやあはれに西雀置土産金魚門より池の傍と河を

よとんちや市をんとてかくもあはれ金魚銀魚を賣るとの有

生舟七八となくして溜水清くま中めり片よ金魚を鱗のそり

しる哉金魚あはれと買求めりり田夫あはれ男ちいさなるあはれ

網よ小桶をたそへあはれ何ぞとこれ持つてあはれ金魚の餌は

一疋仕りし何つめんやうく池に女は賣り五元集藻の花や

金魚あはれいよとこれ不用と点向あはれりこれと眼はめ地とものり

硝子れ中 金魚挿行

文化の江戸風子火を焚きて湯の中よ金魚銀魚を焚きそ見せあ

水鏡のりよ金魚池泳するをりそらけ也よ市成るや池邊なる後江戸人作舟りし館を

ビイトロ

今金魚屋妙々あまの川本河あまの川に養ひ四月はま
たき土の生善移りあまの川に松原の長き池の中は金魚の
石をまき押へて卵を生か付せば生善を他の器に移し日
夜もまき押へて卵を食ふ魚苗をそりもめり卵卵をゆぐ
黄をとりよわくそりば微塵子とてわづらの子ありそれを
飼ふそ後常此紅魚をまきあり
魚苗はしりし始りまき押へて黄あり
あり紅とぬき金をまき肉よりあり

五雑俎卷九は吾國の蒲中め魚を闘ふ事を好みり生魚鱒

編めてよく闘ふ纏繞終日尾尽鬣ハシに断てどもやんば俗は錢片魚と

名く盆中よみてま他魚とて鬣ハシを削りてあまの川にこれを思

む而も蒲人の強きを戦ふとていひはるその是れは白

を為りり形長扁あり妙青黒色め後赤條の間道あり水上

浮てかきま尾を張て闘ふ太倭本州の事とて其の事をも

ば○又小兒小蟹の色赤お浅き多かかして其の事をも

をい售る閩小紀は虎蜉般紅班駁北人異之俗呼為閩公蟹といふ

其の蟹の名は初とし○だんご蟹油拍は水の中を智者あり

よの魚は善化をいふや洛陽集は淡義房氷の天井は

りる春院人傳刺蒙是景は淡義坊賣あり淡義坊は

桶は入めあひあまの川に賣はる幼少あり子供求の

水神又ハ泉ありまありなまの川に大倭本は杜文魚の

條系傳の方言はだんご坊といふ魚あり杜文魚の似り

too to hisan

背より一尾赤杜父魚の類也本草啓蒙杜父魚ト奥京トあり

彦根ト魚ト仙基トみくト勢トありてたんトきトりト物類呼は諸
方の方言を多

く載しれどもだんトきトなほト何ト江トだトめト土ト鋪ト魚トといトふト義ト坊トとト

凡傳經編トもトもト吐トきト浅ト水ト故トもト云ト秀ト白トめトんト諸ト多ト坊トといトふ

也トぞト小ト野ト蘭ト山ト晩ト年トのト諸トもト石トのトちトといトふト魚トをト尾ト曰ト一ト杜ト父ト魚ト

ハ本草ト其ト尾ト岐トとト何トもトかトもトにト寧ト波ト府ト志トもト出トるト泥ト魚トといトふ

いトりト今ト按トるトもト如トもトいトりト異ト同トありトてト各トもト杜ト父ト魚ト土ト鋪ト魚ト泥ト魚トいトふ

一名の辨トしトるトもトいトりトのト名トもト亦ト別トありトトトウトコトニト別ト千トニト石ト別トトトチトコト日ト

トホ彦根トウボウ備前トホウ天作州おも一名の辨トしトるトもトいトりトのト名トもト亦ト別トありト

ダホハセ。ダニギボウもあトりト名トとトいトりトカトニト駿ト河トカトコトブトツト越ト前トトトニトグトウト筑ト後

トニコツ伊セ龜山あトりトりトもトあトりト但ト一トカトクトブトツトカトハトカトニトカト仙ト基トカトハトコトセト伏ト見

ゴツホ防州あトりトりトのト名トをト略トしトてトいトふトもトいトりトとトいトふトもトあトりトとトいトふトもトあトりト

ダニギボウもダホトボといトふトをトやトうトてト諸ト多ト坊トとトいトふト謹ト名ト之ト啓ト蒙

め此名を勢州方言トとトいトふト今トハト系ト原トよト石トのトちトとトいトふトいトりトとトいトふト

芭蕉七部集かトりトりトやト後トをトあトりトてト降ト霞ト拙ト侯ト〇ト杜ト父ト魚トハト河ト豚トのト大トきトめトてト

いトりト魚トといトふト〇ト雜ト字ト通ト考ト捕ト魚ト打ト鳥ト吉ト日ト歌ト雨ト水ト以ト還ト執ト危ト日ト々ト網ト罟ト有ト畜ト胤

餘戊庚二辰奥會取己丁酉己宜西瀕己史壬子禽飲翼戊午庚辛鴻雁

垂日逢搏殺船栽滿九空荒蕪徒羨吁ト開ト池ト塘ト養ト魚ト吉ト日ト歌ト春

兎夏馬良秋鷄久鼠歲有人會得此懶耗不來塘まゝ水瓶の内
 魚を入るれば水脚出まわるといふ物類相感志よ水缸内養魚三兩
 個則活不生脚といふ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

草木

草合くさあひ 馬唐穂うまどうほ 松葉しょうえ かつら草

款冬皮くわんとくわい 茅花せうか 山茶さんか 白しろ 茶ちや 茶ちや 茶ちや

菊きく 菊合きくあひ 金かね 萩寺はぎてら 梅うめ 千葉蓮せんげんれん

桃栗三年とうりつさんねん 橋下はしした 首蒲くびかぶ 稗ひら 桃木とうもく 八重やえ ヒヨンの木

ナニヤモンヤ 松飾しょうしき 松葉の兵しょうえのへい 藤原吉野ふじのら

宗懐荆楚歲時記そうわいしやうじ 日競採百薬ひけいさいひやくやく 謂百草以蠲除毒氣いひやくそうをよみてしよくをたらしめ 故有闘草之戲ゆゑに闘草の戯あり

和名抄わななご 雜藝部ざやくぶ 此記を引て五月五日有闘百草之戲この記をひいて五月五日に闘草の戯あり

樹草じゆそう 此間云こゝに云ふ 久佐阿波世くさあはよ 七種類稿しちしゆるい 凡俗闘百草之戲たゞし俗に闘草の戯あり 獨盛於吳ひとり盛るる 故荆楚ゆゑに荆楚

書紀ニ木祖久々能智
 久々くく 莖こゝろ ナリ草木幹
 ト字書ニモイヘリ
 草ハ莖多ナリ多キナ
 フサト云今人モフサト
 云フアリ

草花多き如
不可族客乃闘以花采々百歩耳互出半不同者云々
よますまのつらむとの戯あり天禄識餘唐人狹見詩闘草當春徑

記有端午四民闘百草之言未知其始也昨讀劉禹錫詩曰共吳王
闘百草不如應身父西施則知起于吳王与西施也あつて禹錫が詩
を唯その國此風俗をいへ他もいふて必しも吳王西施の故事の
あつたせし世諺問答も五月五日をば春日といひて一切の草を此日
にありけり闘草の戯も葉獵より起るめやと何れハ荆楚歳時記の
意なり帝京景物略亦尺頭條雜花水藻山僧園叟不能名之草至
不可族客乃闘以花采々百歩耳互出半不同者云々草花多き如
よますまのつらむとの戯あり天禄識餘唐人狹見詩闘草當春徑
争球出晚田見まの草合もさるるやさささひ花の画巻物もさるる

醒睡咲兒の遊びも草合あり一方よハ藝系まもて出さる侍従
とてはせしむる新めいやまをさるるさるるなり見のほ
あめくかひゆほのまめりし過りしとありかく一種を名をい
て出さるるも琵琶記牛府の仕女院子等が園中遊下條老母
云闘草到好院子云不好香徑裏攀殘柳眼彫蘭畔損花客又無
巧藝云々
みらみえまめりまをさるるさるるさるるさるるさるる
あつたよるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

菟玖波草の 芦のつゝかへ 難波津のなまみとれ 藤の余計の草
あそひつゝかへ 深草の草 守武千白 ちのつゝかへ けいけいけいけい
すまふ 草を 草れ 草より 程とれ 先天下に 秋の 草
ふふ 草を 草れ 草より 又 續山井 お構も 草の ぬのたむ
が那 不吉 草を 草れ 草より 草の ぬのたむ
草の ぬのたむ 昔 雅遊 醉狂 草の ぬのたむ
おどろく 草の ぬのたむ 注は 草を 俗
近江の 草 能也 又 東海 草の ぬのたむ
草の ぬのたむ 西國 草の ぬのたむ 釣の 形 あり

あ花を 草の ぬのたむ 小児の 草の ぬのたむ 又 東海 草の ぬのたむ 別種
あり 江戸の 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ
草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ
付句は 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ
アゴカキバナ 草の ぬのたむ 伊藤 草の ぬのたむ 本草 湿草 類 草の ぬのたむ
春早 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ
菟菜の 類 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ
辨解の 草の ぬのたむ 小雅 麻 鳴章 朱註 草名 草の ぬのたむ 如 釵股 葉 草の ぬのたむ
云々 此物 野外 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ 草の ぬのたむ

朱傳^ル陸璣^ガ艸木疏の文を抄^テをれ^ル地^ノ草^ノ類^ノと^シふ^ル草^ノの根
 節あり^テ葉^ノも^シ似^テ蔓^延する^ル其^ノ根^ノは^シら^シの
 雌雄あり^テ叢^生する^ルの^ハて^ハ刈^キと^リて^ハ水^ヲに^シて^ハ肥^後して^ハ出^ル
 其^ノ後^ハ漢^ノ名^ハ馬^唐なる^ル其^ノ穂^ハ四^ツ五^ツ又^ハあ^るが^りも^シり^て
 倒^リ席^トする^ル二^ツハ^シて^ハ席^ヲを^シて^ハ敲^ケ自^ラ跳^クて^ハ出^ルと^シふ^ル
 か^ら組^合を^シて^ハ席^ヲを^シて^ハ一^ツを^シて^ハ倒^スあ^らヒ^ビの^名義^ハわ^づつ^ふ
 先^レぞ^日干^サ之^めや^早乾^クて^ハ又^ハ和^澤三^才図^合角^紙草^秋起^莖頂^ニ
 作^穂云^小兒^取莖^館穂^結如^織而^用二^箇一^挿其^禮兩^人持^莖相^引而^切
 切^方為^輸以^戲名^カ艸^ノ也^又稻^草或^ハ燈^草也^也

赤^ク拵^リて^ハ三^寸ハ^カに^截て^ハ下^廣く^立て^ハ前^ノの^み
 二^ツと^シて^ハお^撲も^シて^ハ又^ハお^の葉^ノの^腹を^もり^けて^切
 か^ら成^員と^シて^ハお^の葉^ノの^腹を^もり^けて^切
 類^ナり^又松^葉の^葉○万^葉集^ニ振^別之^髪乎^短弥^青草^髪尔^多久^タ
 濫^妹乎^師曾^於母^在界^解十^第汁^あか^たを^ハ湯^髪を^モり^ケて^切
 も^ろの^みも^ろ程^々と^シて^ハあ^らは^しめ^る也^也
 其^ノ葉^ノも^ろの^みも^ろ程^々と^シて^ハあ^らは^しめ^る也^也
 小^細長^葉の^葉も^ろの^みも^ろ程^々と^シて^ハあ^らは^しめ^る也^也
 む^ろの^みも^ろ程^々と^シて^ハあ^らは^しめ^る也^也

葉のやうに結ぶるは、すきまをおのが葉めをくそくつらうとまきまのいし
 葉葉の結も、さき油のて何をびて葉をさぬまひさう、たのが葉
 をいさぐと短くして、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 龍常草あり、タツヒゲ又ノスキヤ、いし踏幸の多、生葉の葉乃長
 四五寸一、根数、百葉叢生、其他の草中、小稚り、生葉の葉あくして
 尺許ある、我鳥觀草をか、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 伊呂芝居、まふ今世さうく、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 苗世の、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
二篇 離うに、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 枯野系小兒、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 羊蹄艸の葉を、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ

莖を心と、葉を衣として、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 乃頭の、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 といふ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 寐ぬを、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 也、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 肥ゆる、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 たの、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 小、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ
 能、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ、さきのあふんよめさあふん今もあまのあ

五元集
紀女郎
羊蹄艸
龍常草
伊呂芝居
苗世
離

○ハ工木

万葉三東市之殖木
乃十九殖木之樹間

平云、コレハ八ノ殖木
ノミニ非ス生立テアル
謂ナリト云リ

古事記曰武命后御
子タチ秋内ニ許斯那

豆牟宇惠具佐契中云
腰煩大河原ノ植草ナリ

生ルテ植ト云ナリ万葉
ニ宇惠多氣能毛頭左

倍登与美云ト云リ
後撰雜三前栽ノナカニ

櫻桐ノ木オヒテ侍ト云
テ行明ノミノモトヨリ

ヒト木コヒニツカハシクハ
クヘテツカハシケル直延法

師凡云色心モ亦タチ子
バアルジニ似タルウキナリケリ今世ニ云ウキモ同シ心ハハシ

昔ハ牛島龜戸辺ノ村童は、葎子あつて、取て、毒あり、
又、葎子、日集、中、二、妹、門、
明和初年十柳点法を、あつり、能く、色、は、如、の、子、

去過不得而草結風吹解勿又將顧、
ニ、キ、ス、キ、カ、子、テ、ク、サ、ム、ス、カ、セ、フ、キ、ト、ク、ナ、コ、タ、カ、リ、
去過不得而草結風吹解勿又將顧、
去過不得而草結風吹解勿又將顧、

あり、
あり、
あり、
あり、

元和寛永の、
元和寛永の、
元和寛永の、
元和寛永の、

奇を、
奇を、
奇を、
奇を、

友の、
友の、
友の、
友の、

意林庵、
意林庵、
意林庵、
意林庵、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、
及ぬ、

花壇地錦抄八元禄
七年江戸染井花戸が
著ハ、書ナリ挿種
類モ多ク、筆テ三百餘
種アレト云ノ狂歌ニヨル
名ハ見エス古今名モ
多クカハルルニヤ

色音禰、
色音禰、
色音禰、
色音禰、

本草は日本紀天武天皇十三年三月吉野人宇閑直弓貢白海石榴昔
を本邦より叙る草花の、有て白、
を本邦より叙る草花の、有て白、
を本邦より叙る草花の、有て白、
を本邦より叙る草花の、有て白、

元禄ノ百椿近クハ寛政ノ播昨今ノ牽牛花ト異ナルナリナモトニ政陽氏牡丹譜ヲ載ルモノ九十餘種ヲハ錢思公カ嘗テ撰録シテモニコソアナレ
花品ノ叙ニハ永叔カ親ヲ
經ル所人ノ稱スルモノヲ取
テ録シ二十餘種ヲ出セリ
カレハ我室永ノ四ノ十餘種
眞盛リニテフノ花漸々
ニ衰アリカレ余カ總角
ノ頃迄ハ約込ノアノ西カ
原チウノ処ニ茶器ヲ常
ク牡丹屋ト云モノ別荘
ニ多ク牡丹ヲ植シカ俗ニ
牡丹屋舗ト呼ナシタリ
家名ヲ牡丹屋ト云モル
モ牡丹ヲ云ルニヨリテナル
ハシラレモハヤ夢ト覺ケン
今ハ彼処ニモ有リトモ
聞エヌ明ノ謝肇淛カ洛
陽牡丹ヲ論シテ氣運
有時而盛衰耶トイヒ
ケニ宣ナリ今ノ俗ニ弄ヘル
牽牛花モ亦復カクノ如クナラニ花弁ノ樂ニ志ヲ移シテ可惜日ヲ暮サシムハ小丈夫ノ所為ニアレト彼モ一時ナリ是モ一時ナリカリイフモ後ハ昔ソ

牡丹屋舗ト呼ナシタリ
家名ヲ牡丹屋ト云モル
モ牡丹ヲ云ルニヨリテナル
ハシラレモハヤ夢ト覺ケン
今ハ彼処ニモ有リトモ
聞エヌ明ノ謝肇淛カ洛
陽牡丹ヲ論シテ氣運
有時而盛衰耶トイヒ
ケニ宣ナリ今ノ俗ニ弄ヘル
牽牛花モ亦復カクノ如クナラニ花弁ノ樂ニ志ヲ移シテ可惜日ヲ暮サシムハ小丈夫ノ所為ニアレト彼モ一時ナリ是モ一時ナリカリイフモ後ハ昔ソ

サメヤスキ 千条ノ花ノ色ヨリモウツルハ人心ナラヌヤ ○コノ三年未ノ刺本牽牛品及ヒ朝良通ヲ聞スルニ異様雜色數十種ヲ載タリシカレハ
黑牽牛ハサラシ黄花モ
亦稀ナリ好者云今年
眞黄処ニ出ツコレ未曾
有ノ奇品ト云ハ梅スルニ
元禄三年ノ印本雜諧物
見草ノ米端ニ朝良ニ白
アリト云腰句ヲ出シテ當
時ノ俳諧師似船晚山
言水等数人ニ上ニ文字
ヲオカセタル似船ニ未世
ヤ常收ノ僧イカニ我黒ハ
時世カナ晩山ハ蝕ニ夜ヤ
ト冠ラセタリ如泉ハあか
ハ置カ子申ハト辞ニ言水
ハ朝良黄ナハ稀ニナリ
五字ヲ置カズ方山ハ返
吞モセサリト由ヲソノ名ヲ
上ニ注シタリユコハ北條
團水カ續キニナシ
氏コニ要ナケレハ贅セズ
コレヲ思フニ天和貞享チコ朝良ノ流行モ一ノ出ルヘニモ言点ヲ於黄花今ノ種ヲニ當動ルハモモテラスアスハ黄アト白アリトイフハカラズ

牡丹屋舗ト呼ナシタリ
家名ヲ牡丹屋ト云モル
モ牡丹ヲ云ルニヨリテナル
ハシラレモハヤ夢ト覺ケン
今ハ彼処ニモ有リトモ
聞エヌ明ノ謝肇淛カ洛
陽牡丹ヲ論シテ氣運
有時而盛衰耶トイヒ
ケニ宣ナリ今ノ俗ニ弄ヘル
牽牛花モ亦復カクノ如クナラニ花弁ノ樂ニ志ヲ移シテ可惜日ヲ暮サシムハ小丈夫ノ所為ニアレト彼モ一時ナリ是モ一時ナリカリイフモ後ハ昔ソ

いぢりてはばち松の影の縁をさしぬきぬき後よの香をさす
よきされしはてはてしなくしと程のりてさしぬきぬき
ぬぐき忠見集九月九日きくは縁をさすけさるふ代人のさしぬき
菊はく人ふ来ぬをむらびてあをさすの散木集九月九日菊はく人
かむらびてよと人のかりけさるふ代人のさしぬき
よき菊のさすはくあや
梅よよ此菊をさすはくあやとよあり縁はくあやを
引て杜若を白き花をさすはくあやとよあり
何花よいさすはくあやし 堀川後庭百首忠房いさすはくあやとよあり
みの縁をさすはくあやとよあり新撰六帖 信実 堀川後庭菊のさすはくあや
けきしはくあやとよあり盛の花はくあやとよあり時をさすはくあやとよあり
きせぬきはくあやとよあり

白く菊のさすはくあや

これ、残菊也と云ふ影のあやとよあり縁はくあやとよあり本於此也
月夜さすはくあやとよあり九月九日の宴のさすはくあやとよあり
より後江相公其文をさすはくあやとよあり文粹よとよあり

よりの十月よきをさすはくあやとよあり残菊也と云ふ影のあやとよあり
をさすはくあやとよありはくあやとよありはくあやとよありはくあやとよあり
をさすはくあやとよありはくあやとよありはくあやとよありはくあやとよあり
ゆるきとよありはくあやとよありはくあやとよありはくあやとよありはくあやとよあり
米者へは湯屋記云九月夜よ入て湯屋の菊はくあやとよありはくあやとよあり
極そのさすはくあやとよあり赤白黄の縁はくあやとよありはくあやとよありはくあやとよあり
菊をさすはくあやとよありはくあやとよありはくあやとよありはくあやとよありはくあやとよあり
門師前大黒冬禁裏種菊花於常御殿之前庭明朝官女等取

綿使蒙階下菊花是謂兼綿又稱衣綿也傳誦菊錦揮灑鬼衣鎮之

内無疾病云故節後頒賜之綿を授けし時隣女暗言

又給雲間谷通茂此語を由して嘆其の離を

花を授けりあはれあきせ給と何多づあはれ花をむとあはれあや

といふりと是は新撰六帖の信実のまこと何れあはれ花の

嘆あはれ後を花をむとあはれあはれあはれあはれあはれ

通茂公ハ定基の言文あて有職の人あはれまはあはれ古書れと

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

もとあはれ後を花をむとあはれあはれあはれあはれあはれ

通茂公の言ハ定基の言文あて有職の人あはれまはあはれ古書れと

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

後山下流得其滋液谷中有三千餘家不復穿井仰飲此水上壽百三

其中年亦七八十魏文帝与鍾繇書九月九日九為陽數而日月

並應俗宜其名以為宜於長久故以燕喜高會屈平悲再之將老思

食秋菊之落英輔射延年莫斯之貴何多あはれあはれあはれ

長久の義あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

散本集のあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

吹花節月令廣義

九月初九日條吹花節

注宋詩アリ楊誠齋

集重九吹花節

公汝吳氏女子詩結句人

世豈能無聚散亦逢佳

節且吹花ナトアルヲ云

サト宋ヨリ始ルニ非ス藝

文類聚ニ梁度肩五侍

燕九日詩玉醴吹花菊銀

床落井桐唐詩紀事申

宋九月九日幸臨渭亭

登高作ニ吹花向酒浮

句アリ本邦ニ花ヲ秋

十顯照散本集ノ注

イリ夫木集酒題隆季

竹葉集離菊ヲ折之花

ヲフル玉ノ盃ヲ田氏家

集管家文章其外マタ

見ユオモフニ菊花ヲ酒盃

浮ノハ酒ヲ吸ニ先花ヲ吹テサケヲ飲ムヲ云ナリ

契沖雜記 紫菊ノ一
モト菊ト云武野
ニヤトラ古歌多ク引リサテ
昔紫トイヒ今赤キ
ヨノ常ノ菊ト云ハ花
ヤウナル色ハ今モ蝦夷菊
ノ外ニハアルナシ

用ひばらうのさし花街よりうらさむ、迂遠なるは、さきよりうらさむ、さき
ひく香をりてをゆき、此花は、記さる、ゆきを思ひ、後世は、後世は、
唯華飾の道し、又年の気候、菊の花、さき、秋菊、落英の、
譜、後序より、論じ、以、落訓、始を、す、南陽菊潭の、事、
古人の、論、さし、菊、落水、の、事、
これ、は、竹、松、故、此、故、事、何、を、い、つ、と、い、ひ、延、喜、の、文、也、永、世、使、
然、る、も、その、さ、さ、り、の、事、○白石翁、洞、叢、の、書、に、大、菊、の、り、ゆ、
尚、如、亦、同、事、ニ、此、を、年、紀、加、登、の、小、波、後、序、の、二十、韵、古、風、を、
和、

詩、の、北、地、の、同、名、水、月、安、積、の、事、此、程、菊、の、他、り、
ゆ、さ、自、澄、め、さ、る、は、中、神、の、事、あり、ゆ、ゆ、
此、花、を、い、て、好、り、享、保、以、菊、を、乃、今、ハ、雅、道、醉、狂、集、近、世、の、
花、を、や、り、て、新、花、を、他、り、出、し、菊、今、乃、今、を、い、て、
丸、山、め、を、借、り、我、ゆ、の、本、此、雜、菊、の、事、
院、道、通、道、の、事、丸、山、の、事、今、を、い、て、好、類、ハ、此、北、
堅、よ、つ、ひ、て、痛、を、い、て、葩、を、い、て、鼻、元、を、い、て、席、上、尾、の、事、
ぬ、る、今、日、の、花、軍、の、魁、け、と、い、て、頭、を、い、て、た、を、い、て、
乃、一、の、葉、と、推、し、る、如、の、舞、娘、が、裳、を、い、て、裳、と、い、て、

樂翁云文化の以時於梅
をそのりて口まきけ
納めてえくか今も
木の株もよき
朽れ老木の梅も
わらわらんもよき
まやいふと

龜戸竜眼寺明和三年
ヨリ秋ヲ植タリ壽阿云
此時代コテモ邊盜賊
時、出テ往來ノ人衣ヲ
剥取ルアリソレ故ニ剥
寺ト異名ニテ院主
悪名ヲ嫌ヒテ秋ヲ植テ
秋寺ト呼ビニナリト云リ
此説サモアルニ本所三
笠町辺ニトツサリ横町ト
異名ヲ呼ル小路アリソハ
往々切アリニヨリ今
ハ其名ヲ知ル者モ少レヘケド近時マデモニカズシトゾ

日本紀舒明末七年秋
七月瑞蓮生ぬ池一莖
二花皇極末三年ニモ
コノ花ノ見ユ此池大和
國高市郡石河村在
忘神ノ御世ニ掘ラント
云

陸放翁在蜀時嘗訪之曾為賦詩云西龍卧穩不飛去鱗爪脱落生菖

苔蓋狀其偃蹇如此甲府穴山町信玄寺、紅梅あり信玄より建られ、制札外支、菖花折一枝可切指任源公之例云、以テ寺ニ義経制札あり、年々之筆ト

源公、近年向嶋北平といひ、骨董家梅圃を以テ、秋梅を名

と呼ぶ、それより諸所、梅を多く、秋の唯一龍梅の如き古木

あり、〇秋花 撈海一得明和八年近江押上村の

龍源寺竜泉寺町の正燈寺ふゆに秋を多く種花するより士女

群遊し、いふりこまきより龍源寺にその名をいひ、秋寺と

呼て今に至り、是れも昔より花を飾り、費用の少く

め、たゞ、いふり、花を飾り、此れも昔より見あをむ、瑞廊偶筆

春花落瓣秋花落葉蓋気候使然也、いとまきと、いふ、春と落

葉の花、ついで、秋、花、も、いふ、花、あ、いふ

〇千葉蓮 輶疔小録、江州益須郡田中村の土家田中氏園中、池あり

め、蓮をいふ傳ふ大白蓮あり、四、五寸、一、莖の上

九の花房あり、小きもの、七、三あり、花、あ、来、年、と

枯残り、群芳譜、千葉蓮と標して、分注、華山有池、産、千

葉蓮、花、服、之、羽、化、今、人、家、亦、有、之、然、頭、重、易、萎、多、難、開、完、と、本、草、啓、蒙

曰、江州野洲郡田中の蓮池、千葉ある者あり、俗、観音蓮と、呼、他、処

は、移、り、育、り、花、ハ、常、の、花、より、小、く、莖、の上、に、三、四、五、葉、の、花、

開く皆千辨めく内は房あり云即集解に千葉者不結実者是なり
と云り享和元年深川猿江泉養寺の池に並頭蓮開きて見物群聚し
たり予も往き紅蓮と覺ゆ我衣は寛保二年戊七月雉波瑞龍寺池
中の一茎二花の蓮さく後み信州大水出深川猿江の蓮開きし翌年
大水あり異がごとしと云り諺は蓮葉高ひと云は五蘭盆の草市
より云れ又蓮葉との事より五蘭盆會の荷葉を用ふ今昔
物語よえくく又雞冠花を用ふ天禄識餘に雞冠花佛書謂之波
羅奢花又汁中謂之洗手花中元節前兒童唱賣以供祖先と云る
○蕁郷贅筆に予東野有小池中植藕每歲將作花往々為雨所敗偶

閱六硯斎筆記曰蓮初透水為驟雨所淋漚中天因出新意剪荷葉線
縫之作兎登狀名蓮笠雨則編覆之元戲咏曰欲展凌波步先為行雨裝
擘羅深覆額擁髻暗藏香莫倚傾珠蓋應同裹玉囊自憐嬌小甚脈々
待息先此事甚韻而制衣亦佳當倣而行之以當護花鈴耳

○桃栗三年折八年といひ諺を童歌に引く桃抄の實生
也尋ぬ為憲の口遊天禄元年に自序あり桃三栗四柑六橘七柚八謂之
菓子頌今按桃樹栽後三年結子他准之可知あり周文華が汝南圃史
に桃之花實並茂而尤易生諺曰可種桃又曰桃三李四梅子十二の諺に
似たり古今事曲集の栗の實の笑の歌の序に三年折八年といひ

さよ懐子集（一） 實（二） 桃（三） 栗（四） 三年（五） 柿（六）
はつらふ又棟八年（七） 竹（八） 中山集（九） 佛（十） 書（十一） 林（十二） や八（十三） 林（十四） の（十五） 柿（十六） の（十七） 菓子（十八）
唐（十九） 花（二十） 波（二十一） 集（二十二） 三（二十三） 十（二十四） 六（二十五） の（二十六） 浦（二十七） 人（二十八） 桃（二十九） 栗（三十） ね（三十一） ず（三十二） 野（三十三） 比（三十四） 春（三十五） 田（三十六） 又

中山集（三十七） 橘（三十八） の（三十九） 柿（四十） 栗（四十一） ね（四十二） ず（四十三） 野（四十四） 比（四十五） 春（四十六） 田（四十七） 又
を（四十八） 豚（四十九） ぞ（五十） しい（五十一） ち（五十二） ち（五十三） ち（五十四）
或は此の此書は... 里んぢやう... 十方野... 許ぶ...

馬出（五十五） 海（五十六） 太（五十七） ち（五十八） ち（五十九） ち（六十） ち（六十一） ち（六十二） ち（六十三） ち（六十四） ち（六十五） ち（六十六） ち（六十七） ち（六十八） ち（六十九） ち（七十） ち（七十一） ち（七十二） ち（七十三） ち（七十四） ち（七十五） ち（七十六） ち（七十七） ち（七十八） ち（七十九） ち（八十） ち（八十一） ち（八十二） ち（八十三） ち（八十四） ち（八十五） ち（八十六） ち（八十七） ち（八十八） ち（八十九） ち（九十） ち（九十一） ち（九十二） ち（九十三） ち（九十四） ち（九十五） ち（九十六） ち（九十七） ち（九十八） ち（九十九） ち（百）

たがう（百一） ち（百二） ち（百三） ち（百四） ち（百五） ち（百六） ち（百七） ち（百八） ち（百九） ち（百十） ち（百十一） ち（百十二） ち（百十三） ち（百十四） ち（百十五） ち（百十六） ち（百十七） ち（百十八） ち（百十九） ち（百二十） ち（百二十一） ち（百二十二） ち（百二十三） ち（百二十四） ち（百二十五） ち（百二十六） ち（百二十七） ち（百二十八） ち（百二十九） ち（百三十） ち（百三十一） ち（百三十二） ち（百三十三） ち（百三十四） ち（百三十五） ち（百三十六） ち（百三十七） ち（百三十八） ち（百三十九） ち（百四十） ち（百四十一） ち（百四十二） ち（百四十三） ち（百四十四） ち（百四十五） ち（百四十六） ち（百四十七） ち（百四十八） ち（百四十九） ち（百五十）

○ウトニ（一） 卷（二）
東鑑（三） 廿六貞（四） 元年（五）
七月九日（六） 浄密（七） 房（八） 前庭（九）
優曇花（十） 開敷（十一） 之（十二） 由（十三） 風（十四） 聞（十五）
鎌倉（十六） 中（十七） 男（十八） 女（十九） 為（二十） 觀（二十一） 之（二十二）
成（二十三） 群（二十四） 自（二十五） 三（二十六） 品（二十七） 遺（二十八） 遠（二十九） 藤（三十） 左（三十一）
近（三十二） 將（三十三） 監（三十四） 云（三十五） 芭（三十六） 蕉（三十七） 花（三十八） 之（三十九）
由（四十） 申（四十一） 之（四十二） 俗（四十三） ニ（四十四） コ（四十五） レ（四十六） ナ（四十七）
ウ（四十八） ト（四十九） ニ（五十） ケ（五十一） ト（五十二） ヲ（五十三） ヌ（五十四） ヲ（五十五） ヌ（五十六） ヲ（五十七） ヌ（五十八） ヲ（五十九） ヌ（六十）

買（六十一） て（六十二） 柿（六十三） ち（六十四） ち（六十五） ち（六十六） ち（六十七） ち（六十八） ち（六十九） ち（七十） ち（七十一） ち（七十二） ち（七十三） ち（七十四） ち（七十五） ち（七十六） ち（七十七） ち（七十八） ち（七十九） ち（八十） ち（八十一） ち（八十二） ち（八十三） ち（八十四） ち（八十五） ち（八十六） ち（八十七） ち（八十八） ち（八十九） ち（九十） ち（九十一） ち（九十二） ち（九十三） ち（九十四） ち（九十五） ち（九十六） ち（九十七） ち（九十八） ち（九十九） ち（百）

為（百一） の（百二） ち（百三） ち（百四） ち（百五） ち（百六） ち（百七） ち（百八） ち（百九） ち（百十） ち（百十一） ち（百十二） ち（百十三） ち（百十四） ち（百十五） ち（百十六） ち（百十七） ち（百十八） ち（百十九） ち（百二十） ち（百二十一） ち（百二十二） ち（百二十三） ち（百二十四） ち（百二十五） ち（百二十六） ち（百二十七） ち（百二十八） ち（百二十九） ち（百三十） ち（百三十一） ち（百三十二） ち（百三十三） ち（百三十四） ち（百三十五） ち（百三十六） ち（百三十七） ち（百三十八） ち（百三十九） ち（百四十） ち（百四十一） ち（百四十二） ち（百四十三） ち（百四十四） ち（百四十五） ち（百四十六） ち（百四十七） ち（百四十八） ち（百四十九） ち（百五十）

しほひ多うんりら大倭本草躑躅の條より六品類云ふ如し近
海ありし出者まじりし

キリニマシ薩山アリモ其地産正保ノ
頃サツヨリ大坂ニワ名明曆丙申年江戸深井ノ花戸

伊兵衛カ方ニ
来リント云ヘリ
蚊^{ヒヨニキ}子樹の木の虫の巢あり大和本艸に俗名

猿瓢といふとありまを揉て空を飛ばせて吹笛の如く

と云ふ此木をゆんといふこゝろあるゆんハ瓢なり續山井夕白

ゆんともやまゆんといふ宗房これ芭蕉桃もあまの句

ゆんともやまゆんといふゆんゆんの字をゆんといふゆん

夕白の瓢をばはなをゆんといふ瓢をゆんといふゆん

ゆん水に浮るゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆん

曰ー ○かんとやゆんゆん 俳諧葛藤下総の山岸又舟を

よせかんとやゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆん

あんどやゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆん

太一餘糧ゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆん

遠郷ニハエシヌ大木アリトゾ飛澤国大野郡ニ三枝郷アリ

アリ高九十三丈幹周リ七尋余根ヨリニ丈ハカリ上ニ大枝ニ

三ニ分ル其葉極似タレ何ノ木カシズ郷ヲ三枝ト唱ルハコレニ

大木アリト云ルハコレナルベシ神武紀ニ初孔舎衛之戦有人

号其地曰母木邑今云飲剛迺奇訛也トアリオモノ木ハ古名ナリ

又右ノ御名ハ三枝トイヘト和名抄下総千葉郡加賀江沼郡共ニ三枝ト云郷各ハサイクサト訓リサイクサハ

サキクサ也又頭宗天皇三年夏四月置福草部トアリ姓氏録ニ

頭宗天皇御世喚集諸凡人等賜餐醢干時三莖之艸生於宮庭採以奉獻仍負姓三枝部和名抄ニ莖和名佐木久佐日本紀私記云福草莖枝々相值葉々相當也コレヲノハ既ニ玄同放言ニ云リ今按ルニ莖字書ヲミルニ枝々相值葉々相當也ト注セリコレヲ莖十木生出ノ形容ノ文字ナルハ三莖三枝ニ同義ナリ福草トハサキハヒガサニテ枝葉生出スル目テタキヲ祝スルニ一草一木ニ限ルニアラザルハシ

○サキクサ

古事記曰持原官下
山由理草之本名云佐
草也トアリ付云新井
氏百合ヲ由理ト云ハモト
韓地ノ方言ト聞ユト云
リキ若共説ノ如クテ
信言名ハ佐草ト云ヒ
ケム師ノ冠辞考サキク
サノ條ニ古ハニ枝ト昏テ
佐紀又佐ト云ニ物ハ佐南
理花ナルヘシト此文ヲ
引テ佐草ト佐紀ト音
通フト云ハトキ信ニ古ハ
此佐草草ヲ三枝トモ
云テツ物ナルニ今世人
ノ氏族ノ名ニ三枝トアリテ
佐伊具佐ト唱フス紀ヲ
音便ニ任セ伊ト云ナリ

其通フ例ハ書記

神武御美ニ山城水門
亦名山井水門ト云ル是
モ一ツノ名ナルヲ草トモ
紀トモ云ルナリ

サキクサノミツ葉ヨツバ
トイヘルニ同シ

正月の松をきりあはせしむるは古くは延喜の明暦元年

乙未十二月廿二日正月の松をきり十音前此方より一古松身五寸

奉又寛文二年の三月六日町船松をきり明七の好えり事と云

松をきり拂ぬぬは寛文十年戌正月又おれし法度の船

て来年よりハお船中なるは毎年お船おれり事と云

むのりより武家よりハ立並おれり事と云飾をきり跡は松の

梢をきり挿おくこのおれし上総姉崎の俗ハ正月門下ハ拂推おど

おきり松を用ひぬ又三日のり松をきりおれし姉崎明神雄神遠

遊びしゆはあはせしむるは古くは延喜の明暦元年

○塩尻三月門松藤原為尹ノ歌三賤ガ門松トイハ高貴ノ家マシテ

百山ノ初代草イハトモ人ニフレテ立ラニ初代草ハ二月二日大内ニ植ル松也門松ノナリト云セリ

ムツキ二日大内ノ御門ニ松立玉ヒシト有トミエタリコレモ亦オガ玉ノ木ニシテ門神ニヒモロケトリ付ケ

侍ルコニコソ為尹卿应永中ノ人ニ職玉千首ケサハマ都ノテアリ引ケテチヒロムニシメ賤ガ門松コレヨリ

三百余年前堀川百首除夜門松ヲ嘗ニ立ルノ程ニ春明カタニ夜ヤ成ヌラニ三位終理大夫藤原顯季又

拾玉集我思ノ君ガスミカハオモケル松タツ門春ノケニキニ大將軍コトハ慈徳和尚ノ家集也右大將軍頼朝

卿ナリモト世俗ヨリ移リタルニテ公事ナラテハ年中行夏ハ入ラス其起リタシカナラヌハサハ後世ニ至リ

文江戸ナトニモ門松日数定マラズ○因ニ塩尻ニ大神宮及ニ攝社ノ鳥居柳付テ柳ヲ結ビタルモ付タルコト

昔ノ御笠ナリト云神代ノ古風也今正月門松ニワラニテ作り飯ヲ入レテ門神ニ供スコレモ古々ヲ撰テ食器ニセシ

カト云リコレヲサマテモアラヌカ
節ヲ備フル為ニ作レルナルヘシ

を撰振と云漢おめかきりあはせしむるは古くは延喜の明暦元年
を撰振と云漢おめかきりあはせしむるは古くは延喜の明暦元年
を撰振と云漢おめかきりあはせしむるは古くは延喜の明暦元年

明世宗晚年愛靜常居西内ユト云テ大臣賜賚物中ニ松竹梅鶯鶯帶アリ

陶説嘉靖憲松竹梅 善物ノ三美ニイヘリ 朝鮮の彼地より江都府の書中を以て日本考證に

いふ物あり明人薛俊が撰ある朝鮮の刊行物に途内明人

乃文詞累々四友亭の詩あり四友亭名万古香清凡曾通到遐方我

来不見亭中主松竹青梅自黄此詩あるがううう松竹梅を以て書を

梅の子を以てり ○類柑子の童の時の様式を思ひ出されて松の葉

針を以てて松の葉は馬蹄の鏝を以てて松の葉を以てて松の葉

を以てて松の葉を以てて松の葉を以てて松の葉を以てて松の葉

は有心の情のそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

そのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその

国立公文書館
National Archives of Japan

必水は清くあまの明月記元仁二年三月十日夕幕下被參安
大和門院云々花瓶之色は花苑秋波集^{卷中}平貞時朝臣前の瓶子は花一
枝はまろりり^{花苑}葉白く^{花苑}まろりり^{花苑}は^{花苑}六條内^{花苑}の^{花苑}花を
水は花のいろあまの^{花苑}花を^{花苑}法武^{花苑}の^{花苑}東山
屋前後より種々の^{花苑}京羽^{花苑}織^{花苑}珠光^{花苑}南都の
種名^{花苑}此後^{花苑}茶道^{花苑}修^{花苑}義政^{花苑}の^{花苑}俗
了弟師^{花苑}六條^{花苑}茶亭^{花苑}を^{花苑}住居^{花苑}義政^{花苑}の時^{花苑}入^{花苑}後^{花苑}珠光^{花苑}後
瓶花の^{花苑}相^{花苑}所^{花苑}法^{花苑}学^{花苑}より^{花苑}洛陽^{花苑}六角堂^{花苑}の^{花苑}池坊^{花苑}専^{花苑}順^{花苑}ハ^{花苑}此
伎を^{花苑}く^{花苑}し^{花苑}又^{花苑}連^{花苑}勢^{花苑}を^{花苑}好^{花苑}む^{花苑}新^{花苑}撰^{花苑}花^{花苑}池^{花苑}集^{花苑}説^{花苑}入^{花苑}り^{花苑}打^{花苑}り^{花苑}て^{花苑}法^{花苑}を

傳へ今よ之花を業として山名各勝志の六角堂昔寺傳あり信正
あまの^{花苑}任^{花苑}ぢ^{花苑}れ^{花苑}は^{花苑}細^{花苑}め^{花苑}今^{花苑}の^{花苑}義^{花苑}後^{花苑}で^{花苑}執^{花苑}教^{花苑}池^{花苑}坊^{花苑}守^{花苑}之^{花苑}云^{花苑}二水記云
大永五年三月六日參青蓮院門跡今日花御會也池坊^{六角堂執行}
候了十瓶有之と云ふ此池坊を専順の後め専慈なる^{花苑}花會
と云ふ^{花苑}その^{花苑}以^{花苑}り^{花苑}も^{花苑}終^{花苑}る^{花苑}日次紀事洛六角堂頂法寺
云^{花苑}近世僧專光得數呂花枝於一瓶中而摸山水之景象倭俗謂之立花
至今代々玩之僧俗為此徒弟者多例年七月七日有立花數瓶砂物寺
人爭見之謂之池坊立花是亦供二星之意也云^{花苑}昨^{花苑}六^{花苑}日^{花苑}晚^{花苑}東^{花苑}西^{花苑}本^{花苑}願
寺末派并家礼以花數種作船狀又造槽形中建草花數呂^{花苑}献^{花苑}門^{花苑}主^{花苑}並

置於堂上今日諸人窺見之そのくしり此を其業とて池坊
の外よみたるを好し仙傳抄を立卷の古法を志す也あてその
中み谷川流といふが河が然るべきも異流ありともめされし池坊よ
法にて集成志すもめや○廻りむか童蒙先習才おのりもあ
しはるるるるり花を唐紙波集廻りづあよさるるるるるる
定主 古法を独吟百韻との法をてあぬ中よの唐紙波より花を山勢
あてを備前を人ぬ法あらん卒はあはしるるるるるるる
おぬまば不思議な用をて各巻とたるるるるるるるるるる
池の坊よ花を唐紙波より人ありおぬ花をより唐紙波の中より唐

生るる本を唐紙波に花紙を唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に
作らぬとて唐紙波を方お伝ふる唐紙波の中より唐紙波を
出し西向く唐紙波をひて唐紙波を唐紙波の唐紙波を唐紙波を
唐紙波より唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に
ありて本を唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に
席の花を唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に
あつける花を唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に
唐紙波にて投入といふあはし唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に
唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に唐紙波に

花をいけりしは...
あろし... 舟の花生... 草山集卷九花瓢銘有... 有人
刻瓢藏花形如舟云... 銘云一瓢藏世界百花千艸何所不容彼貯酒盛
炭胡為乎用之不公呼然大哉惟空含空これ酌花... 漢土も古く
銅蓋の... 花... 用... 張謙德餅花譜云古無... 瓶皆以
銅為之至唐始尚... 器又云貯花先須擇餅春冬用銅夏秋用... 因于
時也... 用...
の... 花... 波... 谷水一雪...
吟百韻 寛文元年...

後撰夷曲集目...
昔の... 佛具の花瓶... 古画...
花の大小多少... 考槃餘事堂供須高瓶大枝方
快人意若山齋克玩瓶宜短小花宜瘦巧最忌繁雜如縛又忌花瘦
于瓶云又云養蘭蕙須用瓢牡丹則用蒲搥瓶方称瓶内須打錫套
管収口作小孔以管束花枝不令斜倒云冬天貯水插花則不凍損
瓶質... 花鏡大抵書齋清供宜矮小為佳喜
銅瓶必花觚銅觶云愛蜜器必紙榼鶯頭云之類方不與家堂香火
前五事件内瓶同至若廳堂大厦所用大瓶不在此例也...

又これをいれ洋土の佛具のうきをうきとせしむるは用ひぬと知らざる
あつたきり又云吁寒土處此名花猶可假乞古昔後何而致若宣
徳成化或龍泉窯者二便可脱俗矣と云々恐らく偽款の物
多り此のそをいふめや宣徳成化の陶器をいふをいふを
いと貴重なるをや竹の筒よ花を入る墓所をいふ用ひ北窓
殞誌よ二重切の花生今世をいふ用ひ無風流なるを
いふと云々苦利休の以て勝るものあり花のいけとあり用ひ
し物のより床へかゝる物と云々世の傳
り小田系陣の時利休が伊豆の葦山ある竹をいふ花生用ひ

と云々園城寺と名付ていふ名物とありとを指月集
ぬ宗易園城寺は筒よ花を入る床をいふをいふ人筒の
よのより水の滴るを置のぬきと云々をいふと云々易
この水けのりぬが余りといふ小田系陣の時少彦土彦
筒の裏の園城寺と書付あり判あり又此は竹と先尺八を
前かへ太閤へ献じし次音曲と上三本あり音曲は利休が何れ
目書又云々古織物の花入を意板ありと云々利休が美し
古人より板のせ帯をいふかゝるは者ありと云々
それより直に直に云々古式古実といふ物あり

続五元集手向テ笑フ
盛物 裏コヒハ非サレ
ヘテト今モ七月盛物
ヲ作リテ賣ルハロラ心ニ
テ紙ヲセテ包ミ表ニ
カタミ飾リオシタリ

安永ノ以ハヤリモツイハ
ニコハダスニ花カニ文ト
アリソソニ文ハ今ハナク
ナリ又他國ハニラス江戸
テ近在請地村落江村
トハ百姓ハ花ヲ植フ業
トス日ニコレヲ切テ浅草
アツマ橋其外朝市アル
処ニ出テ賣ルハ夥シキ
ナリコハタ普飾也
其外芝田山手トトニ
カクアルヘニイケ花行ハ
ルハ知ヘ昔ハナカリシ
ナリ

帝京景物畧草橋
條下草橋惟冬花文
尺三季之種坏土窟
藏之温天坑晒之十月
中旬牡丹已進刀御笑
元且椿芽黄凡所費
一花幾斗万錢一芽一
凡幾千十錢其法自
漢已有之漢大宮園
冬種葱韭菜茄覆
以屋廡昼夜燂温
菜得温気皆生呂倍
巨为少府謂物不時
不宜供奉茶罷之
○時ナラヌ初物御禁止
ノハ草保中ニモコレアリ
右ノ牡丹ノハ活花料
ナレハ昔年文化ノコロ
添井ノ花戸ニ牡丹ノ狂ヒ
咲サ作ス其法塞中

カキコ線宗とてその内床ニ本等脇傍をかける時三具は花を
こと右若くは短あどきめく河うて殊に大車とすうり
むろひそりて処を形に飾りうし海の方を佛に向きい
此のいけ花のいけ花は五務問の此節の林と成りて
お立花ともや見え妙をさかぬあはれなれどいけ花
を他まてる事のいともむろりまじとあざい
たもやくぬる一枝二枝なげ入るるるたをこ
志す心抱もあま錦錆緞世間乃景ふたりし我山神
殺む花あむ風流佳然花の
むろりか杯たあむとあまありとさう好色盛衰記

貞享五年 河州倉橋といふ里に水仙の子は毎年後の名月を
白一郊の言家くはあけつての後民家のに切よぬ花一輪を金子

ま令よ定て是を求め茶の湯よ合をて花屋より方へ一日は賃根
えり借ぬいりて数寄者の心入めはさむトモ紀遠がいた
枝折五篇 宝曆十二年 池の坊に投入の花をりん傳て江戸人出て郊の花を

いけの坊も人舌をさふ獅子に 紀遠 投入をさふいけの坊
まぬ目も花のう人 臺簫 漢土のいけ花のと城記 みるよ
袁中即が瓶史張謙徳が瓶花譜あどいけとこれハ挿植をいけ
又秘傳花鏡いけ花の方を委しくいけ花よりて芝を燒又ハ

紙帳ヲ垂レ其中ニ火ヲ
置入其内ニ入裸身ニテ
花樹ニ絶セズ茶筌ニテ
水ヲウチ洒ケ花ヲ開カスル
ハ三冬ノ養ニテコレヲ獻
スル截テ活花料トスル
ナリ失費如何ゾヤ

泥をろめ監を入又花生の水をさめく志のつらきいづらうと
めくちうといけ花師おが秘傳とさることをあへて江だみ近以
ちうつらうを遠州流石州流宏道流をいひ此れ何れきとらん
ちの遠州流といふものと異あり遠州を小堀宗甫の名を假
しめくちうといふより何れぬことし存あり又同じ又宏道表
中郎が瓶史より思ひよき各あへておもしろむがごとく
瓶史より思ひよき各あへておもしろむがごとく
どもいさくつらうをさるる人の好まうもあきと多
いとあり神ありの香もや假閣の観物よきををれとて技を
摺免奇状を化り出さるるんといふいさくつらうは昔

○花ヲ好ミテ聞ヘタルハ
大江佐国ナリ播ノ国
諸越ノ産ナリ俗語ニモ
諸越ノ佐国トウタフ曼
ナリ東見記系圖等ニ
見タリ掃部頭從五位上
ナリ平生愛花新撰朗詠
佐国詩云六十餘回着
不厭他生定愛花
人ナト云リ本朝無題
詩ニ佐国カ詠ヤ花詩
尋訪野村醉罵醜
○後世カナ草子何人作
ニカ詳ナラズ佐国物語
ニ米アリコレハ天和及ヒ
元禄自録ニ花ツルレ
一葉トアリ佐国トニアツ
カラエ作リ物語ニテ花
ヲ愛セル人ノ法師トナリ
ナ花ノ精トモ尋子未テ
放アヨシ法ヲ聞テサトリサ得シヲ作レル

より巧漢書よ觀物よ香祖筆記上元
大納言東寺の門前めりかろ数日瓶中挿雑花如桃梅桂花仙菜之属と有り徳然後然よ為兼
しる萍の本ゆきもいさくつらうといふとちるその植本ゆきの自物の
形はあゝぬあゝぐり表宏道が瓶史云石公之養花聊以破閑居孤寂
之苦非真能好之也夫使其真好之己為挑花洞口人笑尚復為人間塵土之
官哉世俗除あゝ果樹乃実のあゝぬをば一人杖をたてあゝぬと
立あゝぬとあゝぬといふとて打むとて又一人その樹よりてあゝぬと
ちるゆきといふ兎あり寶舎子或時婦をのりて云君もいひや柿木
あゝぬといふゆきもいさくつらうといふ節のたよ一人斧をききてはを

一 東見記 播州モロコシ
ト云処アリ二人静談ヲ
ハ豆飯マタ次條ニ大江佐
園詩云七十余回着不
厭他生心定愛花人
云見新撰朗詠

○後撰集雜一紀ノ左則
マダツカサ場ヲサリケル時
四十ヨニナリタト申ケレハ
思ハス
贈太政大臣
今マニニトカハ花ノ并カズニテ
コトセアマリ年キハスル
猶コノ下三條名大殿
ノ女侍ノ哥又同部三
セカヒノ君ノ歌年キリト
云フマ

○果樹ハ他ノ小見ナドノ
目ニカニラ又後園植シ
ホシガラスルハ無益シ
紫芝園漫筆ニ卷

東都護國寺住僧
尊融院中柿ノ木ノ子
ナリテコレヲ愛スイマダ
ツミ取ラテアリシヲ人ニ
偷マレシカハ融怒リテ
コノ樹ヲ斫ラセサテ云
ヤウ偷ハ者固ヨリ罪
アリ五五マダコレヲ怒ルハ
其過大ナリ物ノ累ヲ
ナスコカクノ如シトテ其
後ハ果木ヂウエサリシ
トナム
○漢土ニハ竹ノ種類イト
多シ季行カ竹譜小録
ナトニ大カタ出タリ此方
ニハスクナシ
戴思記ニ京ハ禁制
ニテ竹ナキニヤヤヤ寺ハ
参ラト云フアリ寺ハ

きん人といひぬれば又一人をあらわし代りて時を計り年ぎらむは
ゆるし後ふとほくもあはる時を必明年より年かたむ事林云
汝南圃史正月元旦辰刻将斧班駁敲樹則結子不落名曰嫁樹と云
けり又文昌襍録云揚州李冠卿所居堂前杏一株極大実花而不実一
老嫗曰来春為嫁汝冬深忽携尊酒云是婚嫁撞門酒索處士裾繫
樹上已尊酒辭祝再三人咸哂之明年結子無數と云は嫁樹の義
あり
松崎堯信窓のさくらよ三條山侯 松平化 伊予 春の目たりし時仙洞のよ
めとせ後小相壺といふ牡丹を身切て端ひり或時守護の人

あやゆきとて今歳を彼相壺を根とて下賜ふまよ
柿内とて近日傳来の公卿来て院宣をつくらるる爲し先内意
をわよく有るれを炭の云い少もかこきみとのりよれを此の
けりてさして作らむとてさへ中々幸よ各の内をこのちや
爲し相壺を唯一のや海園よ咲くゆふ天下此名おれり
それをふち賜りてを種類ありて名を減し侍り且来るを
牡丹を好む侍りて花よかく種をさすもふたなみの花を
名花を侍りてせりて下し編りてさその賞を侍りて
かき此のや入あやこり編りてさるやと深く新

三井ナルヘニコレハ紹巴ガ
貞徳ヲ誘ヒシタル処ニ
慶長十一年六十六前竹
実ヲ結ビテ枯ルト云コト
下リソノ頃洛中外ノ塚ノ
竹モ多ク枯レ故ニヤ
○堤ニ竹ヲ植ルハ景行
紀五十七年秋九月造
坂手池即竹藪其堤上
ヲ古事記ニモ出テ付
ニ此池ノ下大和国云々
今モ城下郡ニ坂手村アリ
其処ナルヘシカクニ興トモニ
堤ノ竹ノ墳トナリテ記
サセタル古事記ニヤ
リヤム云々
竹ノ龍生日サト云テ植
ル日ヲ三月ノ松ニナキヤ
ナリ松ハ六月ノ竹ノ植
不枯ニヤ云フトス



入リ有リば官使も感シテ帰ル也
 其ノ事ハ古事記ニモ出テ付
 ニ此池ノ下大和国云々
 今モ城下郡ニ坂手村アリ
 其処ナルヘシカクニ興トモニ
 堤ノ竹ノ墳トナリテ記
 サセタル古事記ニヤ
 リヤム云々
 竹ノ龍生日サト云テ植
 ル日ヲ三月ノ松ニナキヤ
 ナリ松ハ六月ノ竹ノ植
 不枯ニヤ云フトス

